

もしも、アイドルじゃない彼女らに出会えていたら……

Egocentrico

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

くあらすじく

大学二回生になったPにはある悩みがあった……。

「友達がいらない。」

これまででは様々に言い訳をしてきたPだが、二回生になったことを機に心を入れ替え友達づくりを始める。

アイドルマスターシンデレラガールズのSSです。

もし、「アイドルじゃない」彼女たちに会っていたら……という妄想だけをフル回転さ

せて書いています。

詳しくどう進めていくかは前書きに書きます。自作のSSを投稿するのは初めてで、拙いですが、よろしくお願いします。

目次

二回生 春学期 1週目 月曜日

1

二回生 春学期 1週目 火曜日

16

二回生 春学期 1週目 水曜日

29

二回生 春学期 1週目 木曜日

44

二回生 春学期 1週目 金曜日

58

二回生 春学期 1週目 土曜日

72

二回生 春学期 1週目 日曜日

85

二回生 春学期 2週目 月曜日

105

二回生 春学期 2週目 火曜日

121

二回生 春学期 1週目 月曜日

P「家を出て大学生活を始めて、今日で丸一年。一人暮らしにも慣れて趣味にも時間が割けるようになってきた)」

P「後は、友達だけだ。学部的に女性が多いのが仇になり友達が出来ない……)」

P「いや、それは言い訳で本当は声をかける勇気が出ないだけなんだ。でも、二回生が始まるこの節目の時に心機一転し、友達を作らなければ！」

く購買く

P「…午前の授業も一人で受けてしまった。今朝の決意はどこにいったんだ。はあ、とりあえず購買でご飯買って一人作戦会議だな」

??「どうしよ。財布、教室に置いてきちゃった。もう並んじやったし、どうしよ」

P「明らかに列の前の女性が困ってる。これは声をかけてみるチャンス！」

P「どうしたんですか？」

??「ふえ？あ、あの、財布を忘れてしまつて……」

P「なら、僕が出しますよ。はい、千円で足りませんか？」

??「え、で、でも、そんな」

P 「ほら、レジ。貴方の番ですよ」

?? 「あ、ありがとうございます」

<560円になりまーす。はい。440円のお返しでーす。

?? 「あの、ありがとうございます。とっつても困っていたので、助かつちやいました」

P 「(正面から見たらめっちゃ可愛い。しかも、ナイスバディ…)」

P 「いいんですよ。困った時はお互い様ですから」

?? 「このお返しは必ずします！ お名前教えてくださいませんか？」

P 「Pって言います。本当に気にしないでくださいね。どうしてもお返しが見たいなら、今度、僕を見かけてた時に声をかけてくださるだけでいいので！」

?? 「え、それがどうしてお返しに？」

P 「貴方みたいな可愛い人に声をかけてもらったらハッピーだからですよ！」

?? 「ええええ?! そんな、可愛いなんて…！」

P 「(照れ顔の破壊力がヤバイ。)」

P 「で、では、また！」

?? 「あ、行っちゃった。P、さん…:お顔が真っ赤だったけど、体調悪かったのかな？」

く花壇く

P 「はあああああ。あのままあそこにいたら照れすぎて倒れるところだった…。可愛
い人だったな……。あ、名前聞くの忘れてた。まあ、人助けできたし、いいか。」

P 「よし、今日はここの花壇近くのベンチでご飯食べながら作戦会議だ」

?? 「あれ？ 今日先客がいるのかな？」

P 「僕が友達を作るチャンスは授業しかない。隣の人に、まずさりげなく挨拶。おは
ようございます」

?? 「え、あ、おはようございます。」

P 「(めっちゃ美人が目の前に居る。髪色似合いですぎ)」

P 「え？ えつとどちら様でしょうか？」

夕美 「ふふ。私は相葉夕美だよ？ お兄さんは？」

P 「Pです……。で、相葉さんはどうして僕におはようございますって」

夕美 「お気に入りの場所に行ったら先にPさんが居て、考え事してるなくって見てた
ら急に、挨拶されたから私もおはようございますって言ったの」

P 「つてことは…漏れてた?! ど、どこから聞こえてました？」

夕美 「まずさりげなく挨拶。おはようございます」

P 「ああああああ。わ、忘れてください」

夕美「あはは、Pさんって面白い♪ ここにはよく来るの？」

P「え？ あ、ここは一回生の時に見つけて、お昼どきなのに誰も居ないから毎週ここで花を見ながら食べてるんです」

夕美「あ、Pさん先輩でしたか。すいません、いきなりタメ口使っちゃって…。いつもは初対面の人には敬語使うのに、親近感湧いちゃって…」

P「相葉さんは一回生か。なら、お互い砕けた話し方でいいんじゃない？ 僕も気がつかわなくていいしさ！」

夕美「いいんですか?！」

P「うん！ その方が仲良くなれそうじゃない？」

夕美「やつぱり面白い！ ありがとう、Pさん♪」

P「(笑顔に浄化されそう)」

夕美「私、お花が好きで。大学内にもお花が咲いてる場所がないか探してた時に見つけたのがここなの！ 色んなお花が咲いてて綺麗だよね」

P「僕も、ここは散策してる時に見つけて毎週月曜日のお昼はここで食べてるんだ」

夕美「Pさんもお花好きなんだ！ ますます親近感湧いちゃう！ ねえねえ、この花はね……」

P「(お花が好きなのではなく、誰も居ないからここでお昼を食べるとは言えなく

て、そのまま相葉さんと談笑しながらお昼休みを過ごした」

＜キーンコーンコーンコーン

夕美「でね、その時の店員さんが……あ、授業始まつちやうよね！ 時間過ぎるの早

過ぎだよー」

P「もつと夕美さんの話聞きたかったけど、次は言語だから出席あるんだ」

夕美「出席無かつても行かないと、でしょ。ふふ。ねえ、また来週もここに居るのかな？」

P「うん！ 月曜のお昼はここって決めてるから」

夕美「なら、Pさんの月曜のお昼は私とご飯を食べる会にしよう！ お花を見ながら

お話しよ？」

P「（これは友達の予感……）」

P「え、いいの!? 相葉さんみたいな美人となら俺が土下座して頼みたいくらいだよ」

夕美「そ、そんな美人だなんて……／＼」ポツ

P「あ、ごめん、僕想ったことが口に出ちやうタイプだから……」

夕美「ふふ。じゃあまた来週ね！ 楽しみにしてるから……」タツタツタツタツ……

P「よっし！ これは所謂女友達ではないか!? それにしてもあんな美人と友達になれるなんて、今日はついてるな」

〈最珈琲前〉

P 「授業も終わったし、ちよつと早いけどバイトに行こう」

P 「(僕のバイト先は大学の正門を出てすぐのカフェ。その名も〈最珈琲〉。ネーミングセンスの無さが漂う店名だか名前負けしないコーヒーの旨さが売りだ)」

P 「(ふらつと立ち寄った時に目にしたバイト募集の張り紙を見てその日に応募、その日に合格し、一年間働いてきた)」

〈カラシココロシカラーン

?? 「いらつしやい☆ トーストにする? コーヒーにする? それとも……わ・た・し
?」

P 「じゃあ未央ちゃんまで」

未央 「お会計100万円になりまーす!」

P 「ゴールドカードで」

未央 「何回払いに致しますか?」

P 「一括で、お願いします」

未央 「ひゅーひゅー! Pさん太っ腹! そんなPさんにはちゃんみおをプレゼント
だ!」

P 「なあ、未央。このくんだり何回目？ そろそろ飽きてこない？」

未央 「いや、Pさんはノリがいいからついやってっちゃうよね」

P 「この子は本田未央。このカフェのバイト仲間（高校生）」

P 「着替えてくるから、ちゃんと仕事してよ」

未央 「イエッサ」

：（時間経過）

P 「なあ、未央が働きだしてから何人お客さん来た？」

未央 「う〜〜んとね、5人！ かな？」

P 「今、席についてるのが常連のお客さん3人。スタッフは僕と未央と店長。どう

やって経営してるんだ、この店は」

未央 「こんな感じなのに店長は焦ってないし、無駄にバイトの待遇いいし、どうなっ

てんだろうね。この店」

P 「僕も同じ事考えてた。未央が入ってくるまでは、バイトは僕だけだったから」

未央 「私が初めてここ来た時なんて、店長も居なくてPさんだけだったもんね！ お

客さんも私だけだったし！ 超笑ったよ」

P 「あの時は焦ったな。未央じゃなかったらクレームもんだよ」

未央 「本当にね。コーヒー頼んだら五分後くらいに、コーヒーってどうやって淹れる

か知ってます？　って聞いて来た時には驚きすぎて声出なかつたもん！」

P「思い出させてないですよ。あの時まで店長が作るものを運ぶだけの仕事だったから。ただ、あの経験から僕だけでも回せるようにしないと。と思い、店長に色々聞いて覚えただよ」

未央「今ではPさんが居たら店長勝手に居なくなってる時あるもんね。自由過ぎでしょ」

P「まあ、未央も居るからな。そういや、未央はなんで、ここでバイトしようと思っただんだ？あんな所見せられたら普通は嫌じゃない？」

未央「え？　うーん、ほらビビツときたつて言うかさ。ここだ！　って思っちゃたんだよね」

P「なんだ？　珍しく煮え切らないじゃないか」

未央「だ、だって……／＼／＼」

未央「だ、だって……／＼／＼」

P「あ、お客さんだ。いらつしやいませ！」

未央「……Pさんが居るから。なんて言えないよ……」

P「ん？　なんて言ったの？」

未央「……鈍感。なんでもないのです」

P「ならいいけど、未央！ お客さんにお水出しといて。メニュー持っていく！」
未央「はあい！ 任せました〜。」

：（時間経過）

P「お疲れ様。店長がお店閉めるからあがっていいってさ」

未央「イエッサー。Pさんもお疲れ様！」

P「前で待ってるから、ゆっくり着替えてきていいよ」

未央「はい」

未央「お待たせしました〜。じゃ、行こう！」

P「うん。それにしても、未央の学校の制服はいつ見ても可愛いな」

未央「でしょでしょ☆ この辺でセーラーなのはうちの高校だけなのだよ！」

P「まあ、未央が可愛いから制服も可愛く見えるだろうけどね」

未央「なっ！ はあああ、Pさんって真顔でそういうこと言っちゃえるよね。ずるいな〜も〜」

P「想ったことが口から出ちゃう病気なんだよ。てか、ずるいってどういう意味さ」

未央「ふふ。教えてあげない！ そうだ、ねえねえ、こないださ友達が…」

未央「あ、ここまででいいから！ いつも、ありがとね」

P「いいの？ 家まで送ってあげるよ？ 未央くらい可愛いと夜道は危ないでしょ

？」

未央「また！ もう…。本気で言ってるからなくこの人。いいの！ もうすぐそこだから。バイバイ」

P「バイト終わりに走れるとか、どれだけ元気なんだ……。さて、帰ろう」

↓ 帰路 部屋の前↓

P「ん？ あれは…」

??「……あ、こんばんは。」

P「(隣の部屋に住んでる綺麗なお姉さんが座って本を読んでいる。なんだこの状況)」

P「こ、こんばんは。えっと、部屋の前でお座りになってなにされてるんですか？

鷺沢さん」

文香「あの、お恥ずかしいのですが……。部屋の鍵をどうやらアルバイト先の書店に置き忘れたみたいで…。どうにかお店入れないか電話などしてみたのですが、生憎繋がりませんので、こうして部屋の前で本を読んで折り返しを待って居たのです…」

P「鷺沢さんがこんな話の初めてみた。会っても、いつも、ぺこつとお辞儀されるだけだから」

P「それは災難でしたね。あの、よかつたらなんですけど、うちの中に入って待つて

ますか？外はまだ冷えるでしょうし」

文香「……いえ、私は大丈夫ですから、気にせずにお部屋にお入りください。こうして本を読んでいると時間を忘れて没頭できますから」

P「鷺沢さんほどの綺麗な人が部屋の外に居るのに、見て見ぬ振りして自分だけ入れないですよ！ それに」グウウウウ

P「あ。」

P「（このタイミングでお腹が！）」

文香「ふふ。」

P「そうだ！ 鷺沢さんはご飯食べましたか？」

文香「……いえ、冷蔵庫にある物を食べようと思っていましたので、まだ、ですね」

P「なら、ちょうどいいですね！僕もこれから作って食べようと思ってたんですよ。誰と一緒に食べてくれないかなくなって」チラッ

文香「……御厚意を無碍にするもの失礼ですよね。では、電話を待つ間だけお邪魔してもよろしいですか？」

P「はい！是非是非！ご飯も食べてくださいね」

文香「それでは、お世話になります……」

……（時間経過）

文香「…ご馳走さまでした。とつても美味しかったです。男性の手料理は初めてでしたが、Pさんはとてもお上手なんですね」

P「そんなことないですよ。昔から家事が好きで料理もしてたんですよ、だから基本くらいならできるってレベルです」

文香「ご謙遜なさらなくてください。私が作る料理より数段美味しかったですよ」

P「褒めてもデザートくらいしか出ませんよ。鷺沢さんは甘い物は大丈夫ですか？」
文香「あの、そこまでおもてなししていたただかなくても…。お邪魔している身なので…。どうかお気になさらず」

P「俺が鷺沢さんに食べてもらいたいんですよ。紅茶と一緒に用意してきますね。少し待っててください」

文香「あの、本当にお気になさらず…。それにしてもお優しい方ですね。お部屋にあげていただいた上におもてなしまでしてくださるなんて」ヴウーヴウーヴウーヴウー

文香「あ、電話がきました。…もしもし鷺沢です。あの…」

P「電話どうでしたか？ 書店に取りに行けそうですか？」

文香「…はい。それが、どうも今日中は難しいそうです。明日取りに伺うことになりました」

P「えっと、じゃあ鷺沢さんは今晚どうするんですか？」

文香「……………どうしましょうか。仕方ありませんから、もう一度部屋の前で読書でしようか」

P「えええ！ それはダメですよ！ お友達のお家で泊まらせてもらうってのはどうでしょう？ 今から電話しても、事情を話せば一晩くらい……」

文香「……それが、あの、大変お恥ずかしいのですが、友人と呼べるような方が大学には一人もおらず……頼もうにも頼める人が居ないのです」

P「鷺沢さん、俺と同じよう悩みの持ち主だったとは!? しかし、このまま彼女を外に放置するのは男がすたるし……。そうだ！」

P「鷺沢さん！」

文香「は、はい」

P「俺と友達になってくれませんか？」

文香「……えっと、わ、私で良ければ、よろしくお願いします」

P「やった！じゃあ、鷺沢さん。今日は僕の部屋に泊まっていてください！」

文香「……そ、それはダメです。これ以上Pさんにご迷惑をおかけできません。元は私の不注意が原因なんですから……」

P「鷺沢さん。僕たちは友達ですから、困ってる時に手を差し伸べてくれるのが友達でしょ？ 僕は迷惑だなんて思ってませんから、仲良くなるために今晩はゆっくり話

しませんか？」

文香「…それで友達になってくれと仰ったのですね。とことん優しいのですね。」

P「あ、それと安心してくださいね。人畜無害が服着て歩いてると言われたような男ですから！ 鷺沢さんがいくら綺麗でお淑やかで魅力的でも押し倒したりは絶対にしませんから」

文香「…その心配はしていませんよ。Pさんは優しい方ですから。それより、私が綺麗？お淑やか？魅力的？」

P「え、周りから言われたことありませんか？」

文香「私は日陰で生きてきたような人間ですから、その様な褒め言葉は似合いませんし、あまつさえ言われたなんてことは一度もありません…」

P「ええええええ！ 俺は鷺沢さんと初めて会った時から綺麗な人だなんて思いましたよ。前髪で目が隠れてしまってますけど、澄んだ青色の目に吸い込まれそうになりましたし」

文香「そ、そんな、あの、私、そんなこと言われてきませんでしたので、どう言えばいいのか……／＼／＼」

P「俺が言うのもなんですが、ありがとうございます。でいいんじゃないですか？ 実際、鷺沢さんは綺麗なんですから」

文香「…では、ありがとうございますPさん」

P「ギャップ萌えとはこのことか。普段は表情があまり変わらないから、笑顔の可愛
いさがハンパねえ）」

P「じゃあ、鷺沢さんはベットで寝てください。僕はソファで寝ますので、ではお
休みなさい」カチッ

文香「…すいません。そして、ありがとうございます。お休みなさい」

P「鷺沢さんがこんな近くで寝てるなんて。ドキドキして、今日は寝れそうにないな
…。今日は色んなことがあったな。明日はもつといい日になるよね。」

二回生 春学期 1週目 火曜日

くヒビヒビ、ヒビヒビ、ヒビヒビヒビヒビ

P 「午前7時。よし、起きるか」

文香 「…あ、お目覚めですか？おはようございます」

P 「(エプロン姿の鷺沢さん。ご馳走さまです)」

P 「おはようございます。あの、もしかして」

文香 「…せめてものお礼にと思い、朝ごはんを。勝手に冷蔵庫の中を使っちゃって、すみません。これしか思いつかなかったもので」

P 「いえ、最高です。お気を使わせてしまいすみません。有り難く食べさせていただきます」

文香 「はい。すぐ準備しますね」

（通学路）

P 「(それから鷺沢さんは書店に鍵を取りに帰った。それにしても朝から幸せ全開だな。目玉焼きトーストも自分で作る五百倍ぐらい美味かったし。彼女ができたらあんな感じなのかな)。…最高過ぎるだろ)」

?? 「あれ? もしかしてあの人は…」

P 「(火曜日は一限から五限まであるからな)」

?? 「あのく。すいませ…」

P 「(コーヒーでも買ってから授業に出ようかな? よし、そうと決まれば)」タツタツ
タツ

?? 「え!? あ、あのく。走って行っちゃいました…。でも、この道を通るなら明日もここで待っていれば…」

く教室 授業中く

P 「(一限は難しい内容に声の小さい講師という睡魔を呼ぶ最強の組み合わせではある。が、今日は寝れぬ。なぜなら、隣に女の子がいるからだ。走って教室に入ってくるやいなや空いてる俺の隣に座り真剣に授業を聞いている。クロスがカバンからはみ出ているからおそらくクロス部なのだろう。朝練の後なのか、制汗剤のいい匂いがする。くうく。なんて幸せなんだ。幸せってここまで続くか?)」

P 「(おつと危ない危ない、邪念のせいで授業を聞き逃すなんてアホすぎる。集中集中)」

くカチャツ

P 「ん？隣の子のペンが落ちたぞ。しかも拾うそぶりがない……まさか」
?? 「……zzz」

P 「寝ていらつしやるー！ しかも、ノートを取る態勢のまま器用に眠っている。……なにより、寝顔が神々しい。寝顔まで綺麗なんてあり得るか？うちの大学には顔の偏差値が高ければ入れる制度でもあるのか？」

?? 「……ん、……zzz」

P 「ピクツとしたが、起きない。これはぐっすりだな。早起きして、朝練したらまあこうなるか。授業も授業だし。そつとしておこう。起こす勇気もないし、寝顔も見ていたいし」

くでは、今日はここまで。

P 「ふう。今日は終わるの、早めだな……。にしても」

?? 「……zzz」

P 「よっぽど眠かったんだろうな。でも、終わったのに起こさないのも可哀想だよな……。そして何より彼女が起きてくれないと出れない」

P 「す、すいませーん」トントン

?? 「……ん？ え?!」

P 「あの、授業終わっちゃいましたよ？」

?? 「え！ あ！ 本当だ先生もういない…」

P 「ずいぶんお疲れだったんですね。朝練ですか？」

?? 「あ、はい！ いつもなら朝練しても平気なんです、昨日夜更かししてしまつて

…。つて、すいません、お邪魔でしたよね？ すぐに退きますから…」

P 「ゆつくりで大丈夫ですよ！あと、これどうぞ」 スツ

?? 「え？ あの、これは…」

P 「今日のノートです。字が汚くて見難いかもしれないんですか、よかつたらどうぞ」

?? 「で、でも、そんな、悪いですし…」

P 「写して来週返してください。一週だけノートが取れてないと

かつて気持ち悪くありません？」

?? 「そ、それはそうですけど…」

P 「ね？ だから、持つて帰つてください。わからないところは来週にでも聞いてく

ださればお教えもできますから」

?? 「…ありがとうございます。初対面なのにここまで優しくしてくださいなんて」

P 「困つた時はお互いさま、ですから！ あまり気にせず受け取ってください。」

美波 「お言葉に甘えさせていただきます。私の名前は新田美波と言います。お名前聞

いていいですか？」

P 「綺麗なのに可愛いって凄いなこの人」

P 「僕はPって言います。お忙しかったり、見つけられなかったらいつでもいいですから、ゆっくり写してください」

美波 「いえ、このノートは必ず来週のこの授業で返しますから！ よろしければ、来週もこの席に座っていただければ確実かと」

P 「わかりました。来週もここに座って新田さんを待つてすね！」

美波 「はい！では、また！さようなら」ペコッ

P 「さよなら。…礼儀正しい美人。凄いな、あの人。来週も会えるのか」グツ

く 大学内 庭園付近く

P 「俺の通う大学には海外からの留学生も多い。そして彼らはよく集まって英語で談笑している。あそこのベンチにも…。英語が話せれば俺もあのグループに混ざれるんだろうな」

?? 「ん？ ワアオ！ ナイスタイミング！」

P 「(金髪のおシャレな人が手を振ってる…。あんな知り合いないぞ…。てか、こっちきてる！)」

?? 「ボンジュール。ジュテーム。シルブプレー♪ えーと、タルト・オ・ポワール？」

P 「(ボンジュール？ フランス語かな？ てか、タルト・オ・ポワールって洋梨のタ

ルトだよな)」

P 「ぼ、ぼんじゅーる。あの、俺フランス語はあんまり知らなくて…」

フレデリカ 「大丈夫だよ！ フレちゃんもよく知らないから」

P 「え？ 日本語上手ですね！」

フレデリカ 「チツチツチ、フレちゃんは日本語が上手なのではなく、日本語が母語なのだ！」

P 「え？ あ、ハーフってことかな？」

フレデリカ 「ピンポン！ フレちゃんはおフランスとジャパンのハーフなんだ。凄いでしょ？」

P 「あ、うん、す、凄い、かな？」

P 「金髪に青色の瞳、スレンダーでオシヤレ。いいところ取りし過ぎだろ。めっちゃ可愛いし、何よりパーソナルスペースが狭い！ 近い近い！」

フレデリカ 「あのね、お兄さん助けてシルブプラー。あそこのベンチに座ってる留学生に声かけられたんだけど、何を言ってるか、さっぱりわからなくてさ。フレちゃん英語もできないだね。」

P 「俺も話せる訳じゃないけど…聞いてみるだけなら…」
フレデリカ 「ありがとお兄さん！ コツチコツチ」

P「(ちよ！ 腕組まれてる！ 可愛いハーフの子に腕組まれてる！ 何この幸せ！ 死ぬの俺?!)」

P「(どうやら留学生はフレちゃんを英語で口説いていたみたいで、CUTEという単語が出る毎にフレちゃんがボンジュールと言う訳の分からない会話を続けていたら、留学生たちは笑顔のまま、シーユーと何処かに行つてしまった)」

フレデリカ「で、結局何言つてたのかな？」

P「僕にもさっぱり。でも、可愛いって何度も言つてたよ」

フレデリカ「だよねー！ フレちゃんキュートだからねー！ お兄さんもそう思う？」

P「うん！ フレちゃんは可愛いと思うよ。服もオシャレだし、本当のフランス人みたいだ」

フレデリカ「えへへ〜ありがと〜。お兄さんお名前は？」

P「Pだよ。フレちゃんのフルネームは？」

フレデリカ「宮本フレデリカだよ！ フレちゃんって呼んでね」

P「なら、このまま、フレちゃん。僕は何とでも呼んでよ」

フレデリカ「…P。ポリタンク？ ポリエチレン？ ポワール？ 梨?! ナツシー！

ナツシー「でもいい？」

P 「Pって呼んでくださいお願いします。」

P 「(ナツシーってP一切関係ないじゃないか…)」

フレデリカ「ナツシーもいいと思うんだけどなく。ねえねえ、Pさん！ 今から暇？」

P 「え？ まあ、三限までは暇だよ」

フレデリカ「ワアオ！フレちゃんも暇なんだよね。一緒におしゃべりしながらお昼ご飯食べよ〜。」

P 「フレちゃん？ もちろん！」

P 「(よっしゃああ！ ハーフの美人とお昼ご飯なんて！ 断る理由が見当たらない

！)」

フレデリカ「じゃあ、行こ〜レッツゴー」

〜大学内 グラウンド近く〜

P 「(フレちゃんと話してたら会話の話題はころころ変わるし、飽きないなく。周りの視線が凄かったけど…。確かに、俺も金髪美人がどんな奴と話しているか興味出ちゃうだろうな。)」

?? 「おおい！その人、ボール投げてくれない？」

P 「ん？あ、このボールかな？行くよー」ヒュン

?? 「バッチコイ！」

P 「あ！ 女の子か！ 強く投げすぎたかも」

P 「危ない」

?? 「ナイスボー！」パシッ

P 「女の子なのに上手い！ しつかりキャッチしてる！」

P 「凄いな…。じゃあね！」

?? 「ちよつとつと、待ったあああ！ お兄さん！ ステイ、ステイ！」

P 「え？」

P 「(めっちゃ笑顔で近づいてくる！ キャッツのユニホーム着てるし、野球部のマネージャーかな?)」

?? 「やつほー！ お兄さんいい肩してるね！ 軽く投げただけで、あのスピードってことは野球経験者だったりする？」

P 「(遠くだとわからなかったけど可愛い！ 345高校の野球部マネージャーかな?)」

P 「んと、野球は少しかじったくらいで本格的にはないですよ？」

?? 「えー、うっそお！ それであの球投げられるの？ お兄さん才能あるって！ 野球しようよ！」

P 「いや、そんな急にほら、大学から部活に所属してもさ…」

?? 「部活? あ、私は野球部じゃないよ! ただの野球好きで、たまに運動場使わせてもらってキャッチボールしてるんだよ!」

P 「あ、そうなんだ! あれ? でも、相手が居ないように見えるけど」

?? 「そーなんだよね。さっきまで一緒にキャッチボールしてた友達が急用で帰っちゃってさ。一人でボール投げて遊んでたんだよ! ねね、お兄さんこれから暇だったりしない?」

P 「今日はもう授業も終わったし、バイトもないから暇だよ! 一緒にキャッチボールする?」

姫川友紀 「おお! お兄さん、ノリいいね♪ やろうやろう! 私、姫川友紀って言

うんだけど、お兄さんは?」

P 「Pだよ! よろしくね!」

友紀 「うん! じゃあ早速やっちゃおう。手加減しないでいいからね!」

P 「(キャッチボールなんて久しぶりだな。このグローブの感触も…)」

P 「準備できたよ」

友紀 「いっくよ。えい!」 ヒュン

P 「(女の子とは思えない良い球だ!)」

P 「ナイスボール」 パシッ

友紀「Pさん！ 遠慮は要らないよ！ さあ、バッチコーイ」

P「(とは言ってもさつきくらしいの力で)」

P「せりゃ」ヒュン

友紀「んくやっぱり男の人が投げる球は違うね。こうずつしりくるって言うかさ」
パシッ

友紀「そういうえばPさんは何歳なの？」ヒュン

P「ん？」パシッ

P「二十歳だよ！」ヒュン

友紀「おお！ そうなんだ！」パシッ

友紀「なら、私と同じじゃん！」ヒュン

P「え？」

P「(私と同じ？ 姫川さん20歳なの!? 童顔すぎっ)」ドゴツ

友紀「ちよっ!? Pさん!? どうして取らないのさ！ 今、思いつきりお腹に当たったよね？ 大丈夫?？」

P「う、うん、大丈夫だよ。それより、姫川さん、同い年なんだね、驚いちゃって？」
友紀「どうして？ 私もう、ビールだって飲めるんだよ！ 球場で観戦しながら飲むビールは最高なんだよ」

P「(童顔だから勝手に歳下だと思つてたとは言ひ難いな…)」

P「あはは、ていうか、野球が本当に好きなんだね。僕が最後に球場行つたのいつだったかな？」

友紀「Pさん行つたことあるの!？」

P「親父が野球好きでさ、昔はよく連れて行つてもらつたんだよ。球場でしか味わえないアツさつてのが、あるらしくつてさ」

友紀「そうなんだよね! 球場全体が一つになつてさ、一つの球の行方を追っかけて一喜一憂して、轟頂のチームを全力で応援するんだ。もう、最高だよ!」

P「姫川さんの話聞いてたら、また行つてみたくなつてきたな」

友紀「本当今度一緒に行こうよPさん! 絶対楽しいからさ!」

P「姫川さんが良いなら是非ご一緒させて!」

友紀「なら、チケット取れたら連絡するからさ、LINE交換しようよ! ほらほら携帯出して」

P「うん、このIDで検索してくれたら出てくると思うから」

P「(女の子とLINE交換してる! しかも、これはデートの約束なのでは!?)」

友紀「OK! また、LINEするね。いや、誰かと行くの久しぶりだから楽しみだ」。燃えてきた! もちろんキャッチの試合だよ! いつがいいかな」

P 「姫川さんの都合のいい日で良いからね」

友紀 「うん！ あと、その姫川さんって言うのやめない？ 同い年なんだからさ、友紀って呼んでよ！」

P 「いいの？ なら、友紀って呼ぶよ！ 僕もPって呼んでくれていいからさ」

友紀 「そうこなくつちや！ 今日ボール拾ってくれたのがPで良かった。これって運命かもね！」

P 「俺も友紀に会えて良かった、よろしくね」

友紀 「へへ、照れるね／＼。こちらこそよろしくね」

二回生 春学期 1週目 水曜日

P「昨日は新田さんにフレちゃん、友紀とも仲良くなれたし、俺の大学生活もこのまま楽しくなりそうだ！ …にして早く出すぎたかな。二限が始まるまで時間あるけど…」

??「あ〜。やつぱり来ました〜。もう、逃がしませんよろ〜。えい」ムギユ

P「えええ?! ちよつ、え? え?」

P「道を歩いていたら知らない女の子に抱きつかれたぞ!」

??「えへへ〜。待っていた甲斐がありました〜。私の事覚えてませんか?」

P「(柔らかいものが! 柔らかいものが腕に!)」

P「(ん? この子…)」

P「あ! こないだ財布忘れてた…」

愛梨「正解です。あの時助けていただいた、十時愛梨です。えへへ、その節はありますがどうございました!」

P「(こ、こんなに可愛い子に抱きつかれるとかいよいよ死ぬのかな、僕)」

P「と、十時愛梨さんって言うんだ! えっと、十時さんは何でここに? 待ってたっ

て言つてたけど、もしかして」

愛梨「はい！ 昨日ここで見かけて声をかけようとしたんですけど、走つて行つちやたので今日は待ち伏せしてたんですく〜」

P「(触れてる指先が冷たい…)」

P「朝からここですつと?!」

愛梨「えへへ〜。だって、絶対会いたかつたから…」ギュー

P「(俺がここを通らない可能性もあるのに……。わざわざ声をかけるっていうお願いのために……)」

P「十時さん…」ギョツ

愛梨「ふえ？ あの、私の手に何かついていましたか？」

P「いや、こんなに冷たくなるまで待つてくれてありがとう。よかつたらコンビニであつたかい飲み物買つて、一緒に学校行かない？」

愛梨「はい！」

愛梨「ええへ、やつぱり優しいな…」

〜通学路〜

愛梨「ミルクティーあつたか〜い！ お金返すつもりが、また買つてもらつちやつて…。ありがとうございますす♪」

P「(本当に可愛い人だな…。しかも、天然っぽいという。反則だろ)」

P「待っていてくれた、お礼だからさ。遠慮せずにどうぞ」

愛梨「ありがとうございます♪」

愛梨「あ、そうだ！ お名前！ お名前まだ聞いてませんでしたよね？」

P「確かに名乗ってない気が…Pって言います。よろしくね！」

愛梨「こちらこそよろしくお願ひします、Pさん！」

P「十時さんはこの辺に住んでるの？」

愛梨「はい！ 一人暮らししてるんですよ」ドヤアアア

P「(ドヤ顔まで可愛い)」

P「なら、ご近所さんなんだね！ 僕も家から出てきて一人暮らしなんだ」

愛梨「私と一緒にですね。Pさんは何回生ですか？」

P「二回生だよ？ 十時さんは一回生かな？」

愛梨「ふうえ？ どうしてわかったんですか？」

P「歳上には見えないからさ」

愛梨「それどういう意味ですか。私だって立派なお姉さんなんですからねえっへ

ん

P「よく幼く見られない？ なんかこう小動物のような可愛さが十時さんにはあるか

ら

愛梨「えへへ。愛梨だぴょん！ どうですか？」ピコピコ

P「…何この可愛い生き物。とつても可愛いよ」

愛梨「ありがとうございます！ Pさんも可愛いですよ？」

P「あ、ありがとう。…喜んでいいのかこれ。十時さんは何学部なの？」

愛梨「社会学部ですよ！ 社ガール、なんです。Pさんは？」

P「社会学っぽいとは思ってたけど、まんまだつたとは。僕は文学部だよ」

愛梨「あれ？ 文学部って男の人は入れましたっけ？」

P「いや、確かに男子は少ない学部だけど入れないことはないよ」

愛梨「そうだったんですね！ 女の子ばかりだから入れないのかと思ってました。えへへ」

P「あ、もうそろそろ教室行かないとね。今日はありがとうね、十時さん」

愛梨「本当ですね、時間が経つのが早いな。いえいえ、私こそ飲み物奢ってもらっちゃって…って、そうだ！」

P「どうかした？」

愛梨「私、Pさんにお礼がしたくて待ってたのに何もできてません！ でもでも、もう授業始まっちゃうし、Pさんどうしましょ」

P 「俺に聞かれても困るけど、でも、お礼ならしてもらったも同然だよ？ 声かけてくれるだけでいいって言ったのは俺だからさ、そんなに気にしなくてもいいよ」

愛梨 「で、でも。そうだ！ Pさんが良ければ携帯番号教えてくれませんか？」

P 「え？ うん、いいよ。はい、これ俺の番号」

愛梨 「登録できました！ また、電話してもいいですか？」

P 「もちろんいいけど…どうして？」

愛梨 「私、お菓子づくりが好きでお家でもよく作るの、今度Pさんをお家に招待して、愛梨が、お・も・て・な・し♪ しちやいます！」

P 「え？ ええええええ!! いや、いいよ、そんな悪いし…。」

P 「(てか、女の子の部屋に行くなんて心臓が保たない!)」

愛梨 「ふふ、これはもう決定事項なんです！ お電話した時に予定合わせたり、好きなお菓子をきかせてくださいね！ では、また〜」

P 「行ってしまった…。まじか、俺が十時さんの部屋に？ …まあ、正直楽しみでしかないな」

〜授業終わり 中央芝生〜

P 「大学の中央には大きな芝生の広場があり、そこにはよく近所の小学生くらいの子たちが集まって追いかかけあったり、ボールで遊んでたりしている」

P「ランドセルを芝生に放り投げ、元気がいっぱいに遊んでいる姿を見ると自分の幼い時の記憶が蘇ってくるようで…」

??「あー！ やつと来た！ お兄ちゃ〜ん」

P「地元の公園で学校終わりに毎日ドロケイしたり、校庭でキックベースしたことも遠い昔のように感じ)」

<トンツ キュツ

P「ん？ 足元に何か…って」

P「（見知らぬ小学生在が足に巻きついてる…なんて日だ！ 一日に二回も誰かわからない人に抱きつかれるなんて…ついてるのかついてないのか）」

薫「お兄ちゃん遅いよ〜。薫、先帰ろうかと迷ってたんだよ？」

P「えっと、薫ちゃん？ おそらく人違いだと思っただけど…」

P「（俺の妹は今家に居るだろうし、そもそも声が違う）」

薫「もう！ 何言ってるのお兄ちゃん！ 薫が間違っわけ…あれ？」

P「ほら、よく見たら違うでしょ？」

薫「本当だ！ お兄ちゃんじゃない！ ご、ごめんなさい」

P「（やつと離れてくれた…）」

P「あはは、そんなに薫ちゃんのお兄さんに似てたのかな？」

薫「うん！ とつても似てる！ だって、薫が間違えるくらいなんだもん」

P「そうだね、妹の薫ちゃんが間違えるくらいだから似てるんだね。で、そのお兄ちゃんが来ないの？」

薫「そうなの…。いつもなら迎えに来てくれて一緒に帰るのに、今日は遅いから心配してたらお兄さんが来たから」

P「間違えちゃたんだね？ よしよし」ナデナデ

薫「あ、ええへ、ありがとうお兄さん！」

P「薫ちゃんがお兄さんの携帯番号がわかるなら俺の携帯を使つてくれてもいいよ？」

薫「え！ いいの？ えつとね、薫わかるよ！ お兄ちゃんの携帯番号！」

P「なら、かけてみようか！ 心配だもんね…はい、かけ方わかるかな？」

薫「うん！ 何度かお母さんのでかけたことがあるから…」ピポパポピ

P「(このくらいの子つて何にでも一生懸命で可愛いよな)」

薫「あ、お兄ちゃん？ どこにいるの？ 薫待つてたんだから…。えええ?! そんなことかおる聞いてないよ。うん…。わかった…大丈夫だよ一人でも帰れるもん！ うん……。この携帯は優しいお兄さんに…うん、わかつてるよもう、じゃあ、切るからね、バイバイ」

P 「どうだった？」

薫 「なんかね、お兄ちゃん今日来れないんだって。お母さんに言つてたみたいなんだけど、薫は聞いてないもん……」

P 「そつかあ、じゃあ薫ちゃん一人で帰るの？」 ナデナデ

薫 「あふ。えへへ。でも、薫一人でも帰れるから大丈夫だよ！ 偉いでしょ」

P 「うん！ 偉いね。でも、薫ちゃん一人は危ないからお兄さんが付いて行ってあげようか？」

薫 「え〜!? いいの？ ありがとうございまー!」

P 「よし！ そうと決まれば、早速行こうか！」

薫 「あ、お兄さんちよつといい？」

P 「うん？ どうしたの？」

薫 「手を繋いでもいい？ お兄ちゃんと帰るときはいつもそうなの」

P 「もちろん！ さ、行こうか」 ギュ

薫 「えへへ、うん！」 ギュ

〜 帰路〜

薫 「お兄さん、Pさんって言うんだ！」

P 「(薫ちゃんと手を繋ぎながら楽しく帰つてると昔を思い出すな……。)(」

P 「そうだよ」

薫 「うーんと、じゃあ、P お兄ちゃんって呼んでいい？」

P 「(P お兄ちゃんか…元気にしてるのかな？ 最近は電話もしてないしな…)」

薫 「…あれ？ もしかして、ダメだった？」

P 「え、ああ、大丈夫だよ！ 薫ちゃんの好きに呼んでくれて良いよ」 ナデナデ

薫 「うん！ P お兄ちゃんは優しいね！」

P 「ありがとう！ 薫ちゃんは何年生なの？」

薫 「四年生だよ！ P お兄ちゃんは？」

P 「俺は二年生だから、薫ちゃんの方がお姉さんだね」 ナデナデ

薫 「ええええ☒ 二年生なのに大きいんだね〜」

P 「二年生って言っても今年で20歳なんだね〜」

薫 「二年生なのに20歳？ んんん？」

P 「(混乱してるなく可愛い)」

P 「あはは」

薫 「あ、でも、薫のお兄ちゃんも今年で20歳だよ！ P お兄ちゃんとお兄ちゃんは

一緒なんだ」

P 「そっかそっか！ 同い年なんだね〜」

薫「薫が間違えるくらい似てるんだもん！ えっへん」

P「(論理はよく分からんが、可愛い。可愛いは正義)」

P「そうだね」ナデナデ

薫「えへへへ。あ！あそこが薫のお家だよ」

P「じゃあ、お兄さんはここまでだね。薫ちゃん、今日はありがとうね！ 薫ちゃんが元気一杯だったから、お兄さんも元気になれたよ」

薫「Pお兄ちゃんもありがと！ 薫ね、学校の先生にも元気だねって言われるの」

P「うん！ また、今度会えたらその時はまた、元気な薫ちゃんできてね」ナデナデ
薫「えへへ！ うん、薫はいつでも元気だよ！」

P「じゃあ、またね、薫ちゃん。ばいばい」

薫「うん！ Pお兄ちゃん、さようなら」

P「(本当に笑顔が似合う、向日葵みたいな女の子だな)」
「家までの道」

P「(さ、後は帰るだけだな)」

P「(せっかくだし、今日はいつもとは違う道で帰ってみようか。新しい発見があるかもしれないし！)」

・・・
(時間経過)

P「ん？ こんな所に花屋さんなんてあったのか！ 知らなかったな…。えっと、Flower Shop SHIBUYA。渋谷？ ここは東京では無いけど、本店が渋谷にあるのかな…。まあ、入ってみるか」ガラガラガラガラ

??「…いらっしやいませ」

P「あ、どうも」

P「レジの店員さん、ずいぶん若くて綺麗だな…。ん？ てか、エプロンの下制服じゃないか？ しかも、未央と同じ…」

??「何か？」

P「え？」

??「じろじろ見られるのはあまりいい気分じゃないんだけど」

P「あ、ああ、ごめん…」

P「(めっちゃ怖い。凜とした表情とその口調はマッチしてるけど)」

??「はあ。ごゆっくりどうぞ…」

P「(あれは思っていないな、早く帰って欲しそうだ…。でも、少し見ていこう、そういえば店長が店内にお花飾りたいて言ってたし)」

P「(あ、この花、確かアネモネだったような…。相葉さんが嬉しそうに春のお花を紹介してくれた時に言ってたアネモネの花言葉は)」

P 「…はかない恋」ボソッ

?? 「…へえ、ちよつとは知ってるんだ」

P 「え？あ、ああ知り合いにお花好きがいてき、これってアネモネだよね？」

?? 「そう、アネモネ。プレートにも書いてあるでしょ？」

P 「あ、本当だ。気づかなかった…」

?? 「はあ。それで、そのアネモネ買うの？」

P 「うん、そうだね、バイト先に置きたいから買っちゃおうかな？」

?? 「ふうん、まあ悪くないじゃない？ 包むから少し待ってて」

P 「なら、他のお花を見て待ってるよ。出来たら教えてね」

?? 「少々お待ちくださいませ」

P 「(いちいち言葉に棘があるな…)」

?? 「で、さっきのは何だったの？」ガサガサ

P 「え？ さっきのとは？」

?? 「私をじろじろ見てたの。そんなことするタイプの人じゃないでしょ？ つてこと

は理由がある。違う？」ゴソゴソ

P 「(なぜそんなタイプじゃないと言い切れるのだろう。最近の高校生はエスパ―なのか。いや、確かにじろじろ見るようなこと普段はしないけど…)」

P 「うん、気になることがあってさ、そのエプロンの下って、345高校の制服じゃない?」

?? 「そうだけど、それでどうして…ってまさか、制服マニアの変態?」 ツツミツツミ
P 「違うよ! バイト先で一緒に働いてる子の着てる制服と同じだったから、ちよつと面食らったんだよ」

?? 「…びつくりする程どうでもいい理由だった」

P 「悪かったよ。本田未央って子なんだけど、知らない?」

くクシャツ

?? 「…本田未央? 今、本田未央って言った?」

P 「え、ああ、もしかして知り合い? 友達だったり?」

?? 「…未央とバイト先が同じ。もしかして、あなたがPさん?」

P 「なんで俺の名を? って未央と仲良いからしか考えられないか。いや、世間って意外と狭いよな」

凜 「この人が未央の…。はあ、こんな形で知るなんて、本当世間は狭いよ。私は渋谷凜。未央から聞いたことない?」

P 「渋谷凜…! 未央がいつも、しぶりんしぶりん言ってたのは君だったのか! よく未央から話は聞いてたけど、ここまで美人だなんて思わなかったよ」

凜 「未央が言ってたのはこれか…。なにそれ口説いてるの？」

P 「え？ あ、申し訳ない、思ったことが口から出ちゃうタイプでき、でも凜って名前がぴったりのクールビューティーって感じだね」

凜 「どうも。はい、包み終わったから」

P 「ありがとう！ おいくら？」

凜 「100万円です」

P 「え、ちよつ、幾ら何でも高すぎない!?？」

凜 「ふふつ、冗談。ゴールドカードで。じゃないんだね」

P 「(微笑む時は高校生らしい可愛い表情になるんだな)」

P 「未央は何を友達に話してるんだよ…」

凜 「五百円になります」

P 「ここだけ敬語なんだね。はい、どうぞ」

凜 「お金をいただくんだから、礼儀は守らないと。ありがとうございます。今後ご鼻
屑に」

P 「強かだなく。うん、また寄らせてもらおうよ！ 今度はお花好きの子か未央と来る
から」

凜 「未央はダメ」

P 「え？ どうして？」

凜 「どうしても」

P 「（これは……。次は未央と来ないとな）」

P 「わかったよ、じゃあまたね」 ガラガラガラ

凜 「ありがとうございます」 ペコッ

P 「Flower Shop SHIBUYA。なるほど、名前だった訳だ。凜ちゃんのお家がお花屋さんだと聞いてたけど、まさかここだとは思わなかったな。たまにはこうやって寄り道してみよう」

二回生 春学期 1週目 木曜日

（朝の通学路）

P 「よし、状況を整理しよう」

P 「俺は一限の為に早めに家を出た。そして、歩いていると制服着た女の子が仁王立ちで道路に立っていた。面食らった俺と目が合うと、その女の子は」

?? 「フーン。その貴方にこのカワイイカワイイ僕を助ける権利をあげましょう！
嬉しいでしょ？」

P 「(と言った。さらに)」

?? 「どうやら貴方は346大学の学生みたいですし、僕は中等部の生徒なので、貴方の後輩と言えるでしょう！ 後輩が困っているのなら助けるのが先輩ですよね？ ま

あ、このカワイイ僕を助けられるなんて幸運を逃す人はいませんか」ドヤアアア

P 「(と続けた。そして)」

?? 「ちよつと！ 聞いてるんですか？ もう、僕の可愛さに声が出ないのはわかりませんが、反応がないと気味がわるいじゃないですか」

P 「あ、それもそうか。申し訳ない、目の前で起こったことを整理していた」

??「はあ、まあ、なんでもいいですか。で、どうするんですか？ まあ、答えは決まっていますけどね！」

P「ん？ えっと、僕は何をすればいいのかな？」

幸子「このカワイイ、興水幸子のお助けをするのか、しないのか、です！ まったくもう、貴方はダメダメですね」ニヤニヤ

P「(ドヤ顔もニヤ顔も可愛いのは珍しいな。流石、自分で可愛いと自負するだけはある)」

P「あ、ああ、僕でよければ、幸子ちゃん？ を手伝うよ」

幸子「フフーン！ 当然ですね！ 賢い選択を言っただけでしょう」

P「ど、どうも、で、幸子ちゃんは何に困っているのかな？」

幸子「そうでした！ まったくもう、貴方が僕の可愛さのあまり見惚れていたから本題を忘れていました！ 落とし物です。落とし物を一緒に探してもらいたいのです」

P「落とし物？ それは大変だね、何を落としたの？」

幸子「え、えっと、それは……その……お、落とし物なんです！ 何だっけいいでしょ？」

P「(……)まで饒舌だったのに、やけに言葉に詰まったな……)」

P「手伝おうにも何か教えてもらわないと探しようがないよ」

幸子「そ、それもそうですね……。ス、ストラップです！ 僕としたことが、どうやら

落としてしまったみたいで……」

P 「さつきまでのドヤ顔が……大切なものなんだろうな」

P 「わかった！ いいよ、一緒に探そうか」

幸子 「フ、フフーン！ この可愛い僕のお手伝いをできることを誇ってもいいんですよ」

P 「ああ、可愛いな幸子ちゃん」 ナデナデ

幸子 「な?! そ、そうです！ やつと僕の可愛さに気づきましたか」 ドヤアアア

P 「ほんとに可愛いな。横はねしている髪も似合ってるし」

P 「それで、どんなストラップなんだい？」

幸子 「キノコとゾンビのストラップです！ 鞆につけていたんですが、どうやら僕が可愛いあまりに逃げてしまったみたいで」

P 「どういう言い訳だよ。了解、キノコとゾンビね！ 探そうか」

∴ (時間経過)

幸子 「な、ない！ どうしてですか？」

P 「(通学路を一通り歩いたが、ストラップは見当たらない……しかし、時間も迫ってきてるな……)」

P 「幸子ちゃん？」

幸子「え？ ど、どかしましたか？ もしかして！ 見つかりましたか!」

P「申し訳ないけど、見つかってないよ…。幸子ちゃん今日普通に学校あるよね？
時間…」

幸子「そりや、僕は中学生ですから…つてもうこんな時間じゃないですか!? 急がないと遅れるじゃないですか!」

P「俺に言われてもさ…よかつたら、だけど幸子ちゃんの携帯の番号を教えてくださいな
いかな？ 俺も授業終わってからもう一度探してみるから、見つけたら連絡してあげる
よ?」

幸子「ああ！ いい心がけですね！ もう、貴方はこの僕の可愛さにメロメロなんです
ね!」

P「ああ、そうだよ。だから、早くして急いで学校行こうな」ナデナデ

幸子「フフーン！ そうですね!では…」

P「(その後、幸子ちゃんから連絡先を聞き、俺も一限へ向かった)」

〈大学内 学生課〉

P「(幸子ちゃんのストラップの探す為にお昼休みに学生課に来た)」

P「(ここには落とし物が届けられ管理してある。もしかしたら、拾った大学生がストラップを届けてくれるかもしれないという少ない可能性も検討してみようと思つてき

たのだが」

??「えっと、キノコとゾンビのストラップですね？ 届けられているか確認しますね」

P「思わぬ発見。学生課の事務員さんつてもつと年配のイメージだったけど、若くて綺麗な人もいるんだな。清楚な感じだし…」

??「あの…どうも学生課には、そういうった物は届けられていないみたいです」

P「(名札に書かれている名前は三船さんか…覚えておこう。今後、学生課にお世話になる時には三船さんで決定だな)」

P「あ、そうですか……。ありがとうございました」

美優「いえ、その…大切なものだったんですか？」

P「(説明するのも面倒だし、俺のものってことにしとくか)」

P「…そうですね。とても大切なものですね」

美優「思いつきの品なんです…。私には君の気持ちがわかりますよ。辛いですよね…」

P「(めっちゃめっちゃ気遣ってくれてる！心まで綺麗な人なんだな)」

P「じゃあ、三船さんも何か探し物が？」

美優「…はい。ただ、私のはもう、見つかりませんが、君のはまだどうにかかります。諦めないでください…」

P「は、はい。ありがとうございます。ただの探し物なのに、親身になってくださり」
 美優「ふふ。学生のサポートがお仕事ですから。紛失届をだしておきますか？」

P「紛失届ですか？」

美優「ええ、紛失届を出してもらっていただければ、学生課に届いた時にあなたに連絡が行くようになってるんですよ」

P「じゃあ、書いておきます」

美優「はい、どうぞ」スツ

P「……よし。これで大丈夫ですか？」カキカキ

美優「えっと、はい。大丈夫ですよ。では、受け取りましたので、紛失物が見つかった場合、連絡しますね」

P「お願いします！ では、失礼します。ありがとうございます」ガチャ

美優「……ふふ、キノコとゾンビのストラップか……。可愛いもの好きなのかな」

…（時間経過）

P「よし、今日も授業終わり！ でも、バイトまで時間あるしな……」ブウーブウー
 ブウー

P「ん？ 電話か……。お、学生課からだ！」

P「はい、Pです」

美優「Pさん、いいお知らせがありますよ！ 先ほど、Pさんの落とし物が届けられました」

P「え?! 本当ですか？ありがとうございます！ すぐに取りに行きますね」

美優「はい。では、お待ちしております」

：（移動中）

P「失礼します」ガチャ

美優「あ、Pさん！ 見つけましたよ」

P「ありがとうございます！ 誰かが届けてくれたんでしょうか？」

美優「あの後各所にお電話で届けがないか確認したところ、文学部棟の事務室に今朝
落とし物の届けがあつたらしく、見に行ってみたら……」

美優「ほら！ このキノコとゾンビのストラップでした」ニコツ

P「(本当にこれはわからんが、キノコとゾンビだからこれだろう……)」

P「そ、それです！ ありがとうございます！」

美優「ふふっ。良かったですね！ 次は落とさないように気をつけてくださいね」

P「はい！ 美優さん色々してくださいみたいです、ありがとうございます。また、
よければ正門前の最珈琲に来てください！」

美優「……え？ どうしてですか？」

P 「あそこでアルバイトしているので、サービスさせてもらいますから！」

美優 「でも、私は何もしてないですし……」

P 「僕は美優さんに助けられたと思っっていますから、迷惑でなければお礼させてください」

美優 「……はい。では、また立ち寄らせていただきますね」

P 「ええ！ 美優さんみたいな美人が来てくださればお店も華やかになりますから是非！ では、失礼します」ガチャ

美優 「あ、お気をつけて……」

美優 「……美人？ 私が……／／」ポツ

くアルバイト中 最珈琲く

P 「今日は未央が休みで俺と店長の二人で店を開けている」

P 「俺が入って一時間。まだお客は来ない」

P 「(やったことと言えば、昨日凜ちゃんのところを買ったお花を飾つたのと皿洗いとテーブル拭きと在庫のチェックだけ……本当にどうやって経営しているんだ、ここ)」

店長 「P君。お願いがあるんだけど」

P 「どうしたんですか？」

店長 「私は今からこの店を出て行くから、閉店時間まで一人で回してもらえますか？ 帰り

P 「少しお待ちください、すぐにお持ちします」

P 「初めて見る子だけど、メニューにないミックスジュースの存在を知ってるという事は常連さんなのかな？」

P 「ミックスジュースです。ごゆっくりお過ごしください」コトツ

?? 「ありがとうございます！ 走って来たので、喉が渴いていたんですよ！」ゴクゴクゴク

?? 「んんん美味しいです!!!」

P 「お口にあつたみたいで、よかった。このお店にはよく来るの？」

?? 「え？ よく来る？ どうしてですか？」

P 「いや、あの、メニューに書いてないはずのミックスジュースを知ってたから…」

?? 「あ、なるほど！ そうですよ！ 自己紹介しないと!!」

P 「え？」

茜 「私の名前は日野茜です！」

P 「(日野…茜…あ！)」

P 「もしかして、店長の？」

茜 「ええ！ いつもお父さんがお世話になってます！」

P 「いやいや、お世話になってるのは俺だから…」

P 「あの店長からどうしたらこんな可愛い娘が産まれるんだよ…話には聞いてたけどこの子が茜ちゃんとは」

茜 「もしや、貴方がPさんですか？」

P 「うん、そうだよ？」

茜 「やっぱり！ お父さんから誠実そうな方と聞いていましたので!!」

P 「そんなアバウトな…。で、茜ちゃんはどうして今日ここに来たの？」

茜 「あ、あああああああああ！」

P 「(拡声器でも使っているのかと思う音量だな…)」

P 「ど、どうしたの？」

茜 「用事をすっかり忘れて、いつの間にかミックスジュースを飲んでました!!」

茜 「Pさん!! お父さんはどこにいますか？」

P 「店長？ 店長は茜ちゃんが来る少し前に…」

P 「(そう言えば、店長出て行く前に、私のことを訪ねにやって来た人が居たら、誤魔化せって言ってたような)」

茜 「前に？ どうしたんですか？」

P 「えっと、ちようど買い出しに行った、かな？」

茜「そうなんですか！ では、少し待てば帰って来るのですね！」

P「お、おそらく？ ところで、どんな用事だったの？」

茜「お母さんにお父さんを連れて帰るように言われました、ここまで来ました!!」

P「つ、連れて帰る？ 店長何かしたの？」

茜「昨日お母さんの大切にしていたティーセットを割ってしまったそうで…昨晩は帰ってこなかったたので、連れて帰るように私が派遣されたという事です！」

P「そんな事が…」

P「(てか何してんだよ店長！ 娘が来ることを見越して出て行くとは)」

茜「お父さんが帰って来るまでの間、私はここで宿題をしています！ やる

ぞおおおボンバーー！」

P「ご、ごゆつくりどうぞ〜」

…(時間経過)

P「(それからお客様が新しく来ることはなく、茜ちゃんの宿題を手伝ったり、お喋りして

いたら閉店の時間になってしまった)」

茜「あ、もうこんな時間になってしまいました！」

P「茜ちゃんと話していると楽しくて時間が過ぎるのが早かったよ」

茜「そ、そんな…あの…あうう…：／／／」

P「照れてるのかな？ 元氣な茜ちゃんも可愛いけど、恥ずかしがってる茜ちゃんもつと可愛いな」

P「そ、そう言えば店長帰って来なかったね」

茜「え？ あ！ そうでした！ わたしはまた、当初の用事を失念していました…」

P「あははは、どこに行ったんだらうね」

P「（帰ってこないつもりだな店長…）」

茜「もうすぐお店は閉店の時間なのに、買い出しから帰ってこないとは…もはや！ 何か事件に巻き込まれているのでは!？」

P「いやいやいや！ だ、大丈夫だつて茜ちゃん。店長が買い出しから帰らないことも何度かあったし、もしかしたらお家に帰ってるかもよ?」

茜「そ、そうですか…！ では、一度帰って確認しなければ」

P「もう、お店も閉めるし、よかつたら一緒に帰らない？ 茜ちゃんのお家まで送るよ。」

茜「そそそそそ、そんな！ いいいい一緒に帰るなんて!」

P「茜ちゃん女の子なんだから夜道は危ないでしょ?」

茜「おお、女の子…で、でも私なんてその…」

P 「それにほら、僕が茜ちゃんともっとお話したいしき。一緒に帰ってくれる？」

茜 「え、あの、は、はい……／＼／＼／＼／」

P 「よし、じゃあ閉めてくるから帰ろっか」

： (帰宅中)

茜 「あ、ここです！ 今日色々ありがとうございました!!!」

P 「ううん、こちらこそありがとうね。また、お店に遊びに来てね！」

茜 「はい！ 本当にありがとうございました!!! 宿題まで手伝っていただけ……」

P 「いいいえ。また、分からないところあったら聞きに来てくれてもいいからね」

茜 「何から何まで……ありがとうございます！ では、失礼します！ おやすみなさい

！」ガチャ

P 「はいはい。おやすみ！」

へタダイマー

P 「(茜ちゃんの大きな、ただいまを聞き届けた後、下宿先へ帰った)」

二回生 春学期 1週目 金曜日

?? 「お、P君起きたの〜? グットモーニン〜」

P 「…おはよう。…で、僕の布団で何してるのかな?」

?? 「何って、ハスハスしてるんだよ。昨日はじっくり味わえなかったけど、君の匂いって、最高だよ〜トリップしそ〜」

P 「できればしないでほしいかな。そして、抱きつかないで! 色々当たってるから!」

P 「(この子妙な色気があるから本当に危ない)」

?? 「にはやはは。気にしない気にしない〜」

P 「気になるんだよ! 離れてくれ〜」

P 「(なぜこんなことに……! くそッ! あの時に断っておけば、よかつたものを……! 自分の押しに弱いところが疎ましい……)」

く 昨晚、茜ちゃんを送ってから家までの道〜

P 「(あ、そういえば幸子ちゃんにストラップのこと言っていないや……。まあ、とりあえず今日はこんな時間だし、明日の朝一にでも電話してみようかな?)」

P 「……ん？ 制服の上に白衣？ え？ なんか、手ぶりながら近づいてくるぞー！」

P 「あれ？ つい最近もこんな事があったような……」

?? 「こんばんは、おにーさん。ちよつといいかにかや？」 ヒラヒラ

P 「こ、こんばんは。どうかしたの？」

?? 「この時間にこの辺をうろついているってことは、おにーさん346大学に通ってる学生さんだよな？」

P 「うん、そうだよ」

?? 「だよな、だよな。なら、この辺に住んでるPさんって人知らない？ 今、探してるんだよな」

P 「え？ P？」

?? 「お、その反応は知ってるみたいだね！」

P 「いや、知ってるもなにも、僕だよ。僕がP」

?? 「わあお！ こんなことってあるんだね」

P 「奇跡みたいな確率だと思うけど……えっと、で、どうして僕を探してたの？」

?? 「それはね。あり？ なんでだっけ？ にやはは」

P 「いや、僕に聞かれてもな……。なら、君の名前は？」

志希 「ん？ 私？ 私はね、一ノ瀬志希って言うんだ。よろしくね、Pさん」

P 「…一ノ瀬。…志希」

P 「まさか、まさかまさかまさか」

志希「この志希ちゃんなんと、昨日アメリカの大学から日本に帰って来たんだよね」

P 「…ピンゴだ」

P 「一ノ瀬先生の娘さんだよね？」

志希「おや？ どーしてそれを？」

P 「一ノ瀬先生から何度か君の話を聞いてたからね…」

志希「にやるほどね。お、そくだ！ 思い出したよ」

P 「ん？ ああ、先生から僕への伝言とかかな？」

志希「んん。遠からず近からずって感じだね。お父さん今日は研究室に籠るらしくって、私も手伝うつもりだったんだけど、帰国したてだし、休みなさいってことで研究室から追い出されたんだよね」

P 「(先生も娘には優しいんだな…)」

P 「それがどうして僕を探すことに？」

志希「志希ちゃん、まだお家持つてない。お父さんはお家に帰らない。研究室から締め出された。」

P 「つまり、帰るところがないと」

志希「そう！　そして、志希ちゃんは優秀な脳みそをフル回転させて考えたの」

P「ギフテッド。あの一ノ瀬先生も言うくらいなのだから、ほんとうに優秀なのだろう」

P「そして？」

志希「お父さんが、この大学にはおもしろい奴が居るって言ってたことを思い出したのだ。その名も、Pさん！」ピシッ

P「…なるほど。だいたい分かったよ。その人を探して、泊めてもらおうって考えたんだよね」

志希「ピンポン！　ピンポン！　せいはい。Pさんには10ポイント追加」

P「いつから、ポイント制が…」

志希「でも、賭けだったんだよね。下宿じゃないなら遠くまで探しに行かないとだし」

P「確かに。どうやってここまで来たの？　まさか、勘とか？」

志希「う〜んとね、巨乳のおねーさんが教えてくれたの。名前は…なんだっけ？　忘れちゃった♪」

P「(おそらく愛理ちゃんだな…)」

P「まあ、会えてよかったよ」

志希「本当にねく奇跡だよねく。じゃあ、立ち話もなんだし、お家へ行くく」

P「後半は僕が言うセリフでしょ！」

志希「おお！ つてことはお家に連れて行って、泊めてくれるんだねく」

P「え？ いや、そんなことは言つてないよ！」

志希「ええく。でも、こんな美少女が夜な夜な一人でフラフラしてるのを放つておくの？ Pさんつて意外と鬼畜なんだねく」

P「うぐつ…！ あーもう、わかつた！ 今晚だけだからね！」

志希「にやはは♪ じゃあ、レッツゴく」

P「勝手に手を引つ張らない！ しかも、逆方向だよ…」

く回想終了く

P「せっかく志希ちゃんにベッド貸してあげて、僕が客人用の布団で寝てたのに…」

志希「なんだかさく、夜中に目が覚めちゃつて。そしたらさ、どこからかい匂いしたんだよ！ それがPさんからだつて気づいた時にはもう潜り込んでたんだよねく」

P「匂いつて…とりあえず！ 服替えて、朝ごはん食べてから大学行くよ！」

志希「ええく、もうちよつと嗅いでいたかにかにや？」

P「わがまま言わないでよ…」

P「バタバタのまま朝ごはんを食べて、二人で大学へ向かった。一ノ瀬先生に文句を言いたかったが、時間もないので、正門を抜けたところで別れた」

くお昼 大学内く

P「志希ちゃんのせいで、朝から身体が重いな…可愛いのに、距離がいちいち近いからドキドキしてるの隠すの疲れるんだよ〜」

<♪

P「ん? どこからか歌声が聞こえる…行ってみよう」

P「あ、あのベンチで座りながらギター弾いてる子が歌っていたのか…それにしても何でこんな場所で」

P「(そこは大学の敷地内で一番人気がない場所として有名な駐車場のベンチだった。大学への通学に車を使って行けないのに、敷地内には広大な駐車場があり、おそらく教員のものであろう車がぼつぼつと数台あるだけでまったく必要性の感じられない場所である。)」

??「いつもどつかで感じてた Noise Volume 上げて 掻き消して」

P「(アコースティックギターを鳴らしながら、透き通った声で歌う彼女はどこか寂しそうで)」

??「どつてことないフリでかき鳴らす Heart Beat く♪」

P 「(何かに訴えているようだった。でも、その姿はカッコよく、凜々しきさえ感じる)」

?? 「本当のアタシをごまかしたくないよ　ハウリング止まらない　見せてあげるよ　熱くなれ」

P 「(だから、自然と近づいてしまっていたし、声も出てしまった)」

P 「…綺麗だ」

?? 「…ん？　もしかして、聞かれてた？」

P 「あ、その、歌声が聞こえて、それで」

?? 「…さてはアタシのファンだな？」

P 「ええっ？　いや、その、上手だなって思ってた聞き入ってた…」

?? 「おいおい、ちゃんとツツコンでくれよ！　アタシ、自意識過剰みたいじゃないか」

P 「ファンではなかったけど、今ファンになったからさ。あながち間違いではない、かな？」

?? 「…アンタ面白いな。アタシは木村夏樹、よろしくな」スツ

P 「ファンのPです、なんちゃって」グツ

P 「(手を出されたから思わず握手しちゃったけど、勘違いとかではないよな…てか、指綺麗だな)」

夏樹「…どうした？ アタシの指なんてじつの見て」

P「あ、ご、ごめん。ギター弾いてたのに指が綺麗だと思って」パツ

夏樹「フフツ、それは口説いてるのか？」

P「いやいや、そうじゃないよ！ えっと、木村さんは何してたの？」

夏樹「何って、Pさんも見てただろ？ 歌ってたのさ、こいつで」

P「そう、そうだよ！ 歌！ 思わず聞き入っちゃったよ！」

夏樹「…そうかい？ ありがと」

P「あの歌は木村さんが作ったの？」

夏樹「…ああ。アタシの歌だよ」

P「やっぱり！」

夏樹「やっぱり？」

P「僕は音楽については素人で技術的なことは何もわからないけど、さっきの木村さんの歌からは何かが伝わってきたんだ」

夏樹「…何か。か」

P「なんて言うのかな、どうしようもない思いをどこかにぶつけているような、そんな寂しさと、自分が自分であることを叫び続ける覚悟しているような強さを感じたんだ」

夏樹「…フフ。そうか、伝わる人には伝わるんだな」

P「だから、もう一度止めちやつたところから聞かせてもらえないかな？」

夏樹「…OK。Pさん、今日はアンタの為だけのスペシャルライブだ」

P「ありがとう！ ファンとしては嬉しい限りだ！」

夏樹「途中からなんかじやダメだ。アンタには最初から最後まで聞いてもらう。いいかい？」

P「もちろん！」

P「(木村さんは先程までの寂しさなんて感じさせないほどの歌うことへの喜びに満ちた声で歌う。この人は本当に歌が好きなんだなと思った。)」

P「凄い！ ブラボー！」パチパチパチ

夏樹「へへッ。ありがとう。アンタのお陰で吹っ切れたよ！ やっぱり、歌うのは楽しい」

P「何があつたのかわからないけど、僕が木村さんの力になれたならよかつたよ」

夏樹「それ、木村さんつてのやめてくれ。夏樹でいい」

P「なら、夏樹で。歌、聞かせてくれてありがとう！」

夏樹「ああ、アタシもPさんに聞いてもらつてよかつたよ」

P「僕も呼び捨てでいいよ、夏樹のファンなんだから」

夏樹「…アンタ最高だよ。了解だ、P。また、こうやってここに歌いに来るからさ、ギターの音が聞こえたなら来てくれよ」

P「もちろん！」

P「(夏樹はそれからアコースティックギターを背負い、帰っていった。そう言えば、夏樹のパーソナルデータは何にも聞いてないな…。まあ、今度会えた時に聞けばいいか)」

↳ 帰路↳

P「そう言えば、今週はまだ行ってなかったな…」

P「よし、今から行くか」

↳ 行きつけのお店↳

P「どうも〜」ガラガラ

??「いらっしやいませ！ あ、Pさん！」

P「こんばんは。今日は響子ちゃんもいるんだね」

響子「はい♪ 今日は金曜日で明日は学校がお休みですから」

P「そっか！ 響子ちゃんは偉いね！」

響子「そ、そんな……／／／」

響子「ずくにおしぼりとお水、持って行きますから！ どこでもご自由にお座りくだ

さい♪」

P「（ここは大学近くにある最近オープンした定食屋さんで、何度もお世話になってい
る僕のお気に入りのお店だ。自炊では再現できない、おふくろの味というのがここには
ある。響子ちゃんのお父さんとお母さんで切り盛りするこのお店はうちの大学生の憩
いの場となりつつある。」

P「ご馳走様でした」

響子「はい♪ ありがとうございます！ どうでしたか？」

P「とっても美味しかったよ。本当にここのご飯はどれを食べても美味しいから最高
だよ」

響子「ふふっ。いつも、ご鼻唄にしていたでいて、ありがとうございます♪」

P「（響子ちゃんは忙しい時や学校の課題の早く終わった日に手伝っている、いわば看
板娘だ。愛想が良く、面倒見がいい上に可愛い。今じゃ、響子ちゃんに会いにこの店に
来る輩もいる程らしい。…まあ、わからなくはない）」

P「そういうえば、今日の小鉢はいつもと違ったような気がするんだけど…」

響子「そうなんですよ！ やっぱりPさんにはわかっちゃいましたか？」

P「うん。具体的につて言われたらわからないんだけどね。いつもの味付けとは違つ
て新鮮だったよ！」

響子「あの、実はその小鉢の味付け、私がしたんですよ…」

P「え？ そうなの？」

響子「はい、お母さんに頼まれちゃって。できるだけ、いつもの味に近づけようとしたんですけど…」

P「そうなんだ！ 響子ちゃん料理も上手なんだね。僕は今日の味付けの方が好きかも！」

響子「ええええ!! ほ、ほんとですか？」

P「うん！ 毎日食べたいくらいだよ」

響子「うええええええ！ そ、それって……／／／」

P「ん？ 毎日ここに食べに来たいうってことだよ？」

響子「あ、あ、あ、私はなんて恥ずかしい想像を……／／／」

P「（顔が真っ赤な響子ちゃんも可愛いな。もう少しからかってみよう）」

P「想像？ 響子ちゃん、どんな想像してたの？」ニヤニヤ

響子「ふえ？ そ、それはその、あの」

<キョウコー、コレサンバンサンニモツテイツテ

響子「あ！ い、行ってきますね」

P「さて、僕ももうお暇しようかな…」

P「(お会計してもらおう時も真つ赤なままの響子ちゃんは少し目を細めて睨んでいるようだったけど、むしろ可愛いだけだった)」

P「ご馳走様でした」ガラガラ

響子「Pさん！ ちょっと待ってください！」

P「ん？ どうしたの響子ちゃん？」

響子「あの、Pさんが良ければなんですけど…一緒に帰りませんか？」

P「あれ？ お店の手伝いはもういいの？」

響子「はい！ そろそろ帰らないと弟たちがお腹を空かせてますし」

P「じゃあ、送っていくよ。お店の前で待ってるね」

響子「すぐ用意してきます！」

く帰路く

響子「すいません…荷物まで持っていたいて」

P「大丈夫だよ。響子ちゃんはお仕事終わりなんだし、帰ってからもご飯作らないといけないんですよ？」

響子「そうですね、弟たちはまだお家で待ってますから」

P「(エプロン姿の響子も良いけど、私服も可愛いな…！ いかにも女の子！ って感じ)」

P「凄いな、響子ちゃんは。お店の手伝いまでして、家事もか…僕も見習わないと！」

響子「ふふっ♪ ありがとうございます！ Pさんは自炊されるんですか？」

P「うん。良くしてるけど、今日みたいにお店に行くときはサボっちゃうんだ」

響子「でも、男の人で自炊できるなんて、Pさんも凄いですよ！ どんなお料理作るんですか？」

P「えつとね、この前は…」

響子「お家の前まで来てくださって、ありがとうございます♪ 荷物もとっても助かりました！」

P「どういたしまして。さっき言ってたこと本気だから、考えておいてね？」

響子「ダメって言うと思うんですけど…。でも、Pさんのお願いですから！ 言ってみるだけ言ってみます」

P「やったね！ じゃあ、またね響子ちゃん」

響子「はい！ 今日本当にありがとうございます！」

P「ばいばい」

響子「さようなら〜」

二回生 春学期 1週目 土曜日

〈自室〉

P 「今日は土曜日！ 僕の通う大学は土曜日は休みだ。その代わりに平日の祝日には関係なく授業があるんだけど……」

P 「(さて、今日はバイトもないし、何しようかな)」

>ピンポーン

P 「ん？ まだ朝の8時なのに、誰だろう？」

>ピンポーン、ピンポーンピンポーンピンポーンピンポーンピンポーン

P 「おお、はい。すぐ出ますよつと」ガチャ

?? 「うふふ。おはようございます。お兄ちゃん♪」

P 「え、ど、どうして、まゆが……」

まゆ 「はい。あなたのまゆですよ♡」

P 「いや、まゆなのは見たらわかるから。で、どうしたの？」

まゆ 「まゆがお兄ちゃんに会うのに用事が必要ですか？ まゆは毎日でも会いに来た

いですよ」

P 「まあ、まゆにしたら我慢してくれた方か……」

P 「まゆは僕の妹で、重度のブラコンだ。女の子らしく可愛いのに、どうしてかずつと俺のことを慕ってくれている……。俺が大学進学で家を出るときも、どうにか着いて来ようとして滅多に怒らない母に叱られてたほどだ。休日は来てもいいって言おうと毎週毎週来て、さらに怒られたそうで……。最近は月一くらいで来るようになってる」

まゆ 「それに今日は、まゆだけじゃないんですよ」

P 「ん？ じゃあ、もしかして」

?? 「おはようございます、お兄ちゃん」ヒョコッ

P 「おおう〜！ 千枝も来てたのか！」ナデナデ

千枝 「えへへ、驚かせちゃいましたか？」

P 「ああ、でも、嬉しいよ。よく来てくれたね」

P 「千枝は年の離れた三女で、よく面倒を見てたからか懐いてくれている。ちなみに僕は四人兄弟の長男で、男は俺だけ。一番上から姉さん、僕、まゆ、千枝となっている」

まゆ 「お兄ちゃん？ まゆが来たのは嬉しくないの？ ねえ、ねえ」グイグイ

P 「もちろん、嬉しいよ。ありがとう、まゆ、千枝」ダブルナデナデ

まゆ 「うふふ」

千枝 「えへへ」

P 「二人が来てるってことは姉さんも？」

まゆ 「いえ、お姉ちゃん今日はたまたまお仕事があるみたいで、いつつもは土日がお休みなのに……」

P 「そっか、まあ、仕方ないよ。お仕事なんだから」

千枝 「でも、残念です……」

P 「とりあえず、入りなよ。朝ごはんまだでしょ？」

まゆ 「はい♪ まゆが久しぶりにお料理作ってあげますね」

千枝 「ち、千枝もお手伝いします！」

P 「じゃあ、お願いね。俺は片付けしておくから」

P 「見られちゃいけないもんは隠してあるが、まゆには毎回見つかるからな……念には念をだ）」

まゆ 「大丈夫ですよ、お兄ちゃん。今日は千枝ちゃんも居ますから♪」

P 「あははは、何のことだろ？ 僕はお片づけが好きなだけだよ」

P 「(超能力かよっ！)」

P 「ふう。食べた食べた。朝ごはんでお腹いっぱいになるのなんて久しぶりだよ」

まゆ 「お兄ちゃんはもう少し太るべきなんです。じゃないとまゆは心配で心配で……」

千枝 「千枝のサラダはどうでしたか？」

P「食べやすいサイズに切られてて、美味しかったよ。ありがとう、千枝」ぼんぼん
千枝「やったあ」

まゆ「ま、まゆの！ まゆのは?!」

P「いちいち、千枝に張り合わなくても…。まゆのトーストもコンスープも美味しかったよ。まゆの手料理は素人の域を超えてるよ」

まゆ「うふっ♡ だって、お兄ちゃんに喜んでもらいたいから…」

千枝「お兄ちゃんはこのからの予定があるんですか?」

まゆ「なぜでしょう。さつきから千枝ちゃんに会話を切られてるような…」

P「ないよ！ 今日は何しようか考えていたところなんだよ。」

千枝「じゃあ、千枝とまゆお姉ちゃんと一緒に遊びましょう!」

まゆ「…いいんです。まゆなんて、妹に負けてしまうダメダメなんですから…」

P「ほら、まゆもいじけてないで、まゆお姉ちゃんも一緒に言ってるんだよ?」
なで

まゆ「あうう。…はい♪ まゆもお兄ちゃんと遊びますよ」

千枝「でも、まゆお姉ちゃんは何度もお兄ちゃんの家に来て独り占めしていたらしいので、今日は千枝がいっぱい甘える日なんです!」

まゆ「そ、それは…」

P 「まあ、今日くらいいいじゃないか、まゆ。千枝は何がしたいの？」

千枝 「ええつと、あ、そうだ！ したいことありました！」

く大学内 芝生く

P 「こことかどうかな？ 木陰で涼しいよ」

P 「(千枝の提案で、お弁当を作つてピクニックをすることになった。場所は大学だが、まゆや千枝にとつては初めて来る所だし、休日はご近所のご家族もお子さんを連れて遊びに来るくらいだから、ピクニックには最適ではある)」

千枝 「はい♪ ここで、お弁当を食べましょう！」

まゆ 「じゃあ、広げちゃいますね」

P 「(まゆは元々家庭的で何でもやってたけど、千枝もお手伝いしたり、積極的になつたな)」

千枝 「お兄ちゃんは千枝とまゆお姉ちゃんの間です！」

P 「あはは、そんな別にどこでも…」

千枝&まゆ 「ダメです」

P 「はい。間に座らせてもらいます」

P 「(少なからず、千枝はまゆの影響を受けてるな…)」

P 「もう、食べれん。朝から腹一杯食べたのに、この量は無理だつて、まゆ」

まゆ「で、でも千枝ちゃんの方が、あくんの回数がまだ一回多いままですよ？」

P「その張り合いやめてくれ……。途中から自分で食べてないから余計に苦しい」

千枝「……ごめんなさい。お兄ちゃんに喜んでもらおうと思つて……」ウルウル

P「うん！ 大丈夫だよ！ 千枝はいい子だね」ナデナデ

P「ほら、千枝にも、あくくん」

千枝「はむはむ。美味しいです」パクツ

まゆ「ああ〜！ お兄ちゃん、次はまゆにも！ まゆにもあくくんつて！」

〜自室〜

P「ふう。無事に戻つて来れた……」

千枝「おかえりなさい、お兄ちゃん♪」

まゆ「おかえりなさい、あなた♡」

P「千枝とまゆはいつ帰るんだ？」

千枝「夜遅くなるまでには帰つてくるように、お母さんに……」

まゆ「ご飯にする？ お風呂にする？ それとも、まゆ？ キャー♡ ダメです、お

兄ちゃん♪」

P「（まゆが妄想の世界から帰つて来ない……触れないでおこう）」

P「そ、そうか。なら、もうすぐここを出ないとだね？」

千枝「…はい。でも、久しぶりにお兄ちゃんに会えたのに…」ウルウル

P「そ、そんな上目遣い&ウルウルされても…」

くピンポーン

P「ん？ この時間にお客さんかな？」

くピンポーンピンポーンピンポーン

P「あ、嫌な予感がする。千枝、念のためにまゆを妄想の世界から引つ張り出して置いて」

まゆ「もう♡ お兄ちゃんったら、大胆です…でも、そこも好き♡」

千枝「えっと、まゆお姉ちゃん…そろそろ…」

くピンポーンピンポーンピンポーンピンポーンピンポーンピンポーンピンポーン
ポーン

P「はい。どちらさま…」ガチャ

??「こんばんは。P君♪」

P「やっぱり。…かえねえだと思つたよ」

楓「今日は獺祭をくだっさい♪ なんて、うふふ」

P「また、僕の部屋で酒盛りする気？ てか、獺祭なんて置いてないから」

P「このオッドアイの綺麗な人は俺のお姉ちゃん。楓姉ちゃん。今はモデルの仕事

をしてて、そこそ有名な雑誌に載るくらいになってるらしい。ちなみに、まゆは読モだ。かえねえはお酒が大好きで、たまに俺の部屋に来て酒盛りする。ダジャレが好きな幼い姉である)」

千枝「あ！ 楓お姉ちゃんだ！」タツタツタツ

楓「千枝は今日も可愛いね」ナデナデ

千枝「えへへ：／／ 楓お姉ちゃん、来れたんだね！」

P「あ、そうだ。お仕事で来れなかったんじやなかったっけ？」

楓「お仕事でしたよ」

P「あ、夕方までだったの？」

楓「いいえ」

千枝「え、ならどうして今ここに？」

P「もしかして、抜け出した、とか？」

楓「ぶつぶー！ 正解は、終わらせて来たよ」

P「ん？ どういう事？」

楓「本当は一日中撮影する予定でスケジュール組んでただけど、ちよつと頑張つて

巻いてきちゃた」テヘツ

P「…なるほど、流石、かえねえだ」

P 「つまりは、今日、ここに来るために予定の半分くらいで撮影終わらせたってことか……。かえねえは昔からそうだ。いつもはマイペースなのに、いざとなると何でもできしてしまう。いや、やってしまう。本来の能力は高いのだ」

千枝 「楓お姉ちゃんもこれから晩御飯ですか？」

楓 「ええ♪ 久しぶりにP君の手料理を食べたくって」

P 「そんな、いつでも食べられるのに……」

楓 「兄弟水入らずで♪ ね？」

P 「かえねえ……わかったよ。なら、まゆと僕で作るから、かえねえと千枝は遊んで」

千枝 「はい！ 楓お姉ちゃん、何する？」

楓 「まずは、カンパリで乾杯しよう」

千枝 「かんぱり？ かんぱい？」

P 「かえねえのダジャレはどんどん雑になつてる気が……まあ、かえねえの相手は千枝に任そう。俺はっつ」ピシッ

まゆ 「はうう。あれ？ お兄ちゃん？」

P 「はい。お兄ちゃんです。今から一緒に晩御飯作ろう」ナデナデ

まゆ 「はあい♡ あれ？ 楓お姉ちゃんいつ来たんですか？」

P 「後で説明するから。ほら、やるよ？」

まゆ 「あ、待ってお兄ちゃん」

：（時間経過）

楓 「さあ、千枝ちゃんもまゆちゃんもお寝んねしましたし…。大人の時間ね♪」

P 「（結局、この狭い部屋にみんな泊まっていくことになってしまい、ご飯食べてから久しぶりに4人で喋っていた。）」

P 「（少し前に千枝が寝て、まゆも我慢してたみたいだけど、ついさつき寝てしまった）」

P 「大人の時間って、単にお酒をもつと飲むってことだよな？ 明日はお仕事ないの？」

楓 「お仕事はワークワークしますよね。ふふふ」グビグビ

P 「質問の答えになってないよ…。あんまり飲んじゃダメだよ」

楓 「はいい♪ それにしても、千枝ちゃんもまゆちゃんもP君のこと大好きですね」

P 「まあ、千枝は昔から可愛がっていたし、まゆはほら特殊なんだよ…。たぶん」

楓 「でも、普通あのくらいの歳の女の子ならお兄ちゃんとかお父さんとか毛嫌いですじゃない？ それが全くないなんて、どうしてでしょう？」

P 「かえねえ…。それ、本気で言ってる？」

楓「ええ、不思議ですよね♪」

P「二人とも完全に、かえねえの影響だよ！」

P「(そう。この姉。楓姉さんが元凶である。)」

楓「ええ。どうして私が？」

P「じゃあ、かえねえ。質問して行くから正直に答えてね？」

楓「あら、クイズでも始まるのかしら!？」

P「僕が高校生の時に行事ごとがある度に、見に来て、みんなの前で抱きついたのは

？」

楓「わたし♪」グビグビ

P「モデルとして芸能事務所に所属する時の条件として、かえねえが唯一提示したのは？」

楓「P君の誕生日には絶対に何があっても休ませてください♪」グビグビ

P「四年連続ミスキャンに推薦され、圧倒的人気でミスキャンパスに選ばれながらも、その座を断り続けた理由は？」

楓「P君が投票に参加してないから♪」グビグビ

P「初の巻頭モデルに抜擢され、そのインタビューでの質問。好きなタイプの男性は？」

楓「弟のP君♪ うふふっ」グビグビ

P「それだよ……かえねえ……」

P「(かえねえも重度のブラコンで、しかも自覚していない。そこが一番の問題で、周りがどう見てるか、とか何て言ってるか、なんて気にならない。なぜなら、自覚がないから。それがさも普通であるかのように)」

楓「うふふ。だって。お姉ちゃんが弟を好きなのは普通だよね？」ピトツ

P「近い！ 近い！ って、酒くさっ！」

楓「あらく。P君。女性に対して臭いだなんて、ダメなんですよ。うふふっ」
ギユウウウ

P「かえねえ!? 本当に近いから！ 色々当たってるから！」

楓「当てるんです♪ このまま押し倒しちやえろ」ドスン

P「ちよっ！」パタン

P「(かえねえが抱きついたまま倒れてしまった……！ お酒の匂いではない、いい匂いするし、色々柔らかいし！ 頑張れ俺の理性！)」

楓「……P……くん……zzzz……」

P「え？ あれ？ かえねえ？」ツンツン

楓「……ふにや……zzzz」

P 「寝てるよこの人……」

P 「かえねえは酔うとすぐ寝てしまうタイプで、それがわかっているから外では飲み過ぎない。だからこそ、家や僕の部屋だと飲みたいだけ飲む。そして、寝る」

楓 「…zzz…ありがと…Pくん」

P 「はあ。まゆと千枝が寝てるところに運ぶか…」 ナデナデ

P 「かえねえを移動させて、3人が仲良く川の字で寝てるところを見ると本当に微笑ましい」

P 「おやすみ、みんな」

P 「(僕も酒盛りの後片付けを終えてから、ソファで寝た)」

二回生 春学期 1週目 日曜日

〔自室〕

P「(朝起きてから、かえねえは仕事へ、千枝とまゆは実家へ帰っていった)」

P「(さつきまでの賑やかな雰囲気から一転し、一人になると何故かやけにこの部屋が寂しく感じられた)」

P「:気分換えよう。買い物にでも出かけよう。電車で少しかかるけど、まあ、いいか」

〔最寄駅〕

P「(平日はいつも学生で溢れかえっているこの駅も日曜はまばらにしか人がいない。まあ、まだ10時だ、日曜日くらいのもんぴりと過ごしている人の方が多いのだろう)」

P「(ホームにはお年寄りの夫婦と戸愚呂兄弟みたいな女の子のペアが居た)」

P「(気になる。気になって仕方ない。なんだろう、あの戸愚呂兄弟。リアルであんなことになってるの初めてみた)」

??「おろろせせせ。杏は行きたくないんだせせ」

?? 「ダ☆ メ☆。だって、杏ちゃん最近お出かけしないでしょ?? だから、きらりが連れてってあげるゆ☆」

?? 「はあ。これじゃ、連れて行くって言うか、拉致だよ」

?? 「うええ?! きらりは杏ちゃんのことを思ってる…」

P 「(気になるすぎて会話を盗み聞きしたけど、全然関係性がわからない。180cmは超えているであろうフリフリの服を着た女の子が、140cmを下回ってそうなの、だるだるの服を着た女の子を担いでいる)」

杏 「ほら、後ろのお兄さんも見てることだし。そろそろ降ろしてよ。もう逃げないからさ」

きらり 「にやわ!」

P 「(あ、目があった)」

P 「ご、ごめん、別にジロジロ見てた訳じゃなくって…単純に気になってしまって」
きらり 「うみゆ。きらりん、はずかしい」

杏 「いや、恥ずかしいのは杏だから。降ろして。はよ。お兄さんも見てないで頼んでよ!」

P 「ええ!? あ、ああ、えっと、降ろしてあげたらどうかかな?」

きらり 「杏ちゃん逃げないに?」

杏「うん。て言うかももう逃げるのも疲れるし、諦めたよ」

きらり「なら!!」ダキッ

杏「おおおお! きらり! 高い高い! 抱き上げないで!」

P「うあわ。180cmくらいに高い高いされると、ああなるんだな。ホームの屋根に当たりそうだ)」

きらり「ほい!」ストーン

杏「……命の危険を感じたよ」

P「えつと、二人は姉妹?」

きらり「うへへ☆ きらりんと杏ちゃんが姉妹だつてー!」

杏「違うよ。杏ときらりは同じ年だよ」

P「ええ!?! だつて!」

杏「あくあ。お兄さんも見た目で人を判断してしまうんだね。悲しいね。しくしく」

きらり「でもでも、確かに杏ちゃんときらりんじや同じ年には見えないかもに☆」

P「:言う通りかもね。ごめん。見た目で判断しちゃた。申し訳ない」ペコッ

杏「いや、そんなマジレスされると杏も困っちゃうんだけど」

きらり「おにーさん♪ 大丈夫だに! きらりと杏ちゃんは気にしてないよ?」

P「…ありがとう。二人は高校生？」

杏「そーだよ。杏もきらりも17歳。つまり！ JKなのだ！」ドヤア

P「もしかして、345高校？」

きらり「そうだに☆ おにーさんは大学生かに？」

P「うん。346大学の二回生だよ。Pっていうだ」

杏「杏は杏だよ」

きらり「きらりさんは諸星きらりって言うんだに☆」

P「杏ちゃんにきらりちゃんね。二人はどこに行くの？」

杏「杏は家に帰りたい」

きらり「もう。杏ちゃんてば！ きらりん達は今からお買い物に行くんだに☆」

P「杏ちゃんは嫌そうだね」

杏「杏は家から出たくないの。休日くらいずつーつとダラダラして過ごしたいのに…」

きらり「むええ。だって、杏ちゃん学校以外に外に出ることないでしょ？ たまには外に出ないと身体によくないに？」

P「それは確かにそうだよ。たまには太陽の光を浴びないと」

杏「でも、寝る子は育つて言うでしょ？ やっぱ家で寝てた方がいいんだ！」

P「(育つてない例が自分という、なんて皮肉なんだ)」

きらり「あ！ 電車来たよ！」

杏「うえええええ！ きらりくほんとのほんどに行くの？」

きらり「行くの！ 今日には杏ちゃんに似合うお洋服と髪留め買うんだから！」

P「(現在の杏ちゃんの服はダルダルに伸びている上に「働いたら負け」と書いてある。これはきらりちゃんが世話焼きたくなるのもわかる)」

杏「服なんて着れたら何でもいいじゃん！ 髪なんて留めれたら何でもいいじゃん！」

きらり「だくくめ☆」ズルズル

杏「いくくやくくだくく」

P「(この後、杏ちゃんときらりちゃんと目的地が同じことがわかり、着くまでの間話して過ごした)」

く中心市街地く

P「(杏ちゃんときらりちゃんと駅で別れてから、目的のお店へと向かう道中で事件は起きた)」

P「(ギャルがチャラ男にナンパされてる)」

チャラ男「えええ、いいじゃんちよつとだけだつて！」

ギヤル「だから、待ち合わせしてるって言ってんじやん。無理」

P「(こ)ういうの初めてみたかも。てか、男の方もこんなところでよくナンパできるな。度胸ありすぎだろ)」

チャラ男「じゃあ、待つてる間でいいから！　そこで一緒に待つてようよ」

ギヤル「はあ。無理って言うてんじやん。それと、ナンパするなら鏡見てからにしないよ。それじゃ釣られる子いないよ？」

チャラ男「ああ？」

P「(お)っと、怪しい空気に)」

チャラ男「ちよつと来い」ガシッ

ギヤル「きゃっ！　痛い！」

P「(見)て見ぬ振りにはできない！　状況になってしまったな…)」

P「ちよつとちよつと！　ストップストップ！」

チャラ男「なんだ、お前？」

P「(と)りあえず、手を離そうか」グッ

ギヤル「くっ…痛ったあ…」サスサす

P「(ど)うせなら僕と握手しましょうよ」ギユッ

チャラ男「はあ？　お前なに勝手に…」ググググググググ

チャラ男「痛い痛い痛い痛い！」

P「今日のところは穏便に済ませましようよ？ね？」

チャラ男「痛い痛い痛い痛い痛い！ わかったから！ 離せ！」

P「どうも」パツ

チャラ男「はあ、はあ。てめえ！」

P「まあまあまあまあ。落ち着いて。ほら、周りの人も見てますよ？」

チャラ男「あ？」

くヒソヒソ、ジロジロ

チャラ男「チツ。白けた。帰る」スタスタスタ

P「(はああああああ。怖ええええ！ 喧嘩になったらヤバかったああああ。心臓バクバ

クいつてるよ！)」

ギャル「…ありがとう」

P「え？ ああ、どうも」

P「(何だか気だるい感じのギャルだな。可愛いんだけど、活気という明るさみたいなのは感じられないな)」

P「腕、大丈夫？ 強く握られてたみたいだけど」

ギャル「一瞬だったし、それに助けてくれたしね。大丈夫だよ」

P 「よかったよ。でも、あそこで煽っちゃダメだよ。どんなこととしてくるかわからな
いんだから」

ギヤル 「だって、うざかったから。何回も無理だつて言つてんのに諦めないからさ。
わからせてやろうと思つて。えへへ」

P 「いや、えへへつて……。まあ、無事で良かった。次からは気をつけなよ。じゃあ」

ギヤル 「え！ ちよつと！ どこいくの？」

P 「え？ 買い物に……」

ギヤル 「せっかく助けてくれたんだから、なんかお礼させてよ」

P 「別に助けたつもりはないから、大丈夫だよ？」

ギヤル 「てか、友達遅れてくるらしいから、それまで付き合つてよ。ついでにお礼さ
せて♪」

P 「(まあ、こんな可愛い子とお茶できる機会もないだろうし、いいか)」

P 「じゃあ、お礼はなしで。待つまでのお茶に付き合う感じで」

ギヤル 「ふふ♪ ノリいいね！ 名前は？」

P 「Pだよ。君は？」

加蓮 「北条加蓮だよ。それじゃ、ポテト食べに行こー！」

P 「え？ ポテト??」

加蓮「そう！ ポテト！ ほら、行くよ」ガシッ

P「え、ちよつと！ 行くから、引つ張るのなし」

く某ハンバーガーチェーン店く

P「(年相応の笑顔で僕の腕を引く加蓮に連れていかれ、某ハンバーガーチェーン店へ)」

加蓮「やつぱり、ここのポテトは最高だよね。余裕でLサイズ食べれちゃうよ」ムシヤムシヤ

P「まあ、確かに美味しいよね。ふとした時に食べたくなるっていうか……」

P「(お礼とは何だったのか、ポテトとジュースのお金は僕が出した。まあ、いいんだけど……)」

加蓮「ええ、私は週5でも食べられるけどな」ムシヤムシヤ

P「あはは。それは流石に無理じゃない？」

加蓮「おお！ 唯来れそうだって！」

P「え？ 唯？」

加蓮「私が待ち合わせしてた友達が唯。その子がここに来てくれるってさ」

P「そうなんだ。じゃあ、僕は行くよ」スッ

加蓮「ダメ。唯がPさんに会いたってさ」ガシッ

P 「え？ どうして？」

加蓮 「私がLINEでPさんのこと唯に言ったら、そんなカッコいい事できる人会いたく〜いってさ」

P 「いや、そんなカッコいい事なんてしてないから…」

加蓮 「あ！ 唯〜。こっちだよ！」

唯 「おお！ やっほ〜〜☆」

加蓮 「ほら！ この人がPさん！」

唯 「あは☆もつと男らしいゴリゴリの人かとおもったら、可愛い系じゃん！」

P 「可愛い系って…褒められてるのかそれは…」

P 「(加蓮ちゃんの友達だからギャルなのかなとはおもってたけど、金髪でスタイルのいいギャルだった。てか、可愛い子の友達は可愛いんだな…)」

唯 「唯だよ☆ ごめんね、唯が遅れちゃったから加蓮ちゃんに逆ナンされたんでしょ？」

P 「え？ いや、違うけど…」

加蓮 「唯〜。また、適当なこと言ってる〜」

唯 「あり？ そうなの？ まあ、その辺詳しく聞きたいからさ！ おにーさんも唯たちと一緒に行く！」

加蓮「お、それいいね！ さあ、Pさん！ 行こ！」

P「いや、行こつて言われても、事態を把握できてないんだけど…」

唯「ええええ。JKが休日に行く所なんて、あそこしかないっしょ☆」

P「シヨツピング？」

加蓮「ぶぶー！ 正解は…」

唯「カラオケ！ つてことで、行つてみよ〜」グイ

P「ちよつ！ まつ」

加蓮「唯しつかり右手持つててよ。私左手引つ張るから！」グイ

P「(両手に華とはこの事か!? つて、違う！ JK二人とカラオケはなんか犯罪の匂

いが！)」

唯「オツケー！ このまま引つ張つて行つちやお〜」

P「まだ、いいつて言つてないんだけど〜!?」

くカラオケく

P「(その後、加蓮ちゃんと唯ちゃんに無理やりカラオケに連れてこられてしまった

…)」

加蓮「お、次は私の番♪ Pさん聴いててよ」

P「うん。加蓮ちゃんの歌聞かせてもらうね」

加蓮「く〜♪」

P「(上手だな〜。唯ちゃんも上手かったし、最近のJKはみんなこうなのかな?)」

唯「ねえねえ、おにーさん♪」

P「え? ああ、どうしたの唯ちゃん」

唯「おにーさんって、Pって名前なんですよ? ウケる☆」

P「ウケるって言われてもな…唯ちゃんの苗字は?」

唯「唯はね、大槻唯だよ? ねえねえ、おにーさんはどうして加蓮ちゃんを助けたの

?」

P「(話題がコロコロと…フレちゃんと話してるみたいだ…)」

P「どうしてって、そりゃ困ってたからだよ?」

唯「マジ? ☆ 加蓮ちゃんが可愛かったからじゃなく?」

P「そんな下心ないよ…うん、ないよ」

唯「ええ〜怪しいな〜。じゃあ、唯がナンパされてても助けてた?」

P「唯ちゃんが困ってそうなら、声はかけると思うよ?」

唯「あは☆ おにーさん、優男だ! ウケる☆」

P「でも、唯ちゃんも気をつけなよ。どんな人がいるかわからないからさ」

唯「唯の事、心配してくれてるの〜?」ピトツ

P「ギャルはみんな距離が違いののか……」

加蓮「こら！　そこ、いちやいちやしない！」

P「人聞きの悪いのと言わないでよ！　いちやいちやなんて」

唯「いや〜ん☆　唯、Pさんに口説かれちゃった♪」

加蓮「Pさん？」ギロツ

P「いやいやいや、してないから！」

唯「あんなに優しくしておいて、捨てるんだね……」シクシク

加蓮「Pさん？」

P「唯ちゃんも悪ノリが過ぎるって！　加蓮ちゃんも話聞いて！」

唯「……ふふ。慌てた顔、超ウケる☆」コソコソ

P「つて、唯ちゃん笑ってるし！」

加蓮「……ふふつ。まあ、唯のイタズラ好きは知ってるから、そんなところだと思っただけだ」

唯「唯は唯だかんね〜」

加蓮「それにしても、Pさん慌てすぎだつて」フフツ

P「……心臓が悪いよ。こないじられ方慣れてないんだから」

加蓮「はい！　次、Pさんが歌う番だよ」

P 「え？ 僕も歌うの？」

唯 「もち！ ほらほら、早く入れて歌っちやいなよ☆」

P 「ええええ…聞いておくだけのつもりだったのに…」

加蓮 「ダメ♪ せっかくカラオケ来たんだから歌わないと！」

P 「…まあ、それもそうか。わかったよ、僕も参加させてもらうね」ポチポチ

唯 「Pさんわかつてる〜☆」

〜帰り道〜

P 「フリータイムの終了時刻まで、三人でカラオケを楽しんだ後、二人と別れてからできなかった買った買い物を済ませて、家に向かっている」

P 「それにしても最近、女の子にばかり出会う気がする…どうして男友達ができないのだろう…」

?? 「お、ええ人っぽいお兄さん見つけ」

P 「昔から姉妹と一緒にいる時間が多かったのもあり、どうにも女の子という方がしっくり来てしまう時もあるけれど、男友達がいけないのは死活問題だ…」

?? 「ちよつと、お兄さん♪」チョンチョン

P 「はい？」

?? 「あたしな、すこーし困っててな。助けれくれへんかな？」

P 「白い。肌が白い。そして、髪の毛は銀色。何より綺麗な人だ」

P 「困ってるんですか？ 僕でお力になれるなら、お手伝いしますけど…どうされたんですか？」

?? 「あたしな、お家を追い出されてもうてな。絶賛家出中なんやけど、フラフラしてたらお金なくなってもうて、今夜泊まる場所なんねん」

P 「ああ、そうなんですか？」

?? 「そうなんよ。でな、お兄さん一人暮らし？」

P 「そうですけど…」

P 「(お願いってまさか…)」

?? 「おお！ やっぱり、出会って縁のものやん？ だからさ、今晚泊めてくれへん？」

P 「(うわあ。志希ちゃんパターンだ。いや、志希ちゃんばまだ知り合いの娘さんだったけど)」

P 「いや、それは、ほら初対面ですし…」

?? 「あれ？ そんなに驚かへんのやね？」

P 「まあ、今週こんな感じのこと2回目ですから…あ」

P 「(別に言わないでいいことを…)」

?? 「ほく、ならお兄さんは一度目はこんな感じの子を保護したことがある訳やく」ニヤニヤ

P 「あれはほら、一応知り合いの知り合いみたいな感じでしたし」アセアセ

周子 「ええく、でも、初めて会ったには違いないんやろ？なら、このシューコちゃんも泊めてくれるんやんな？」

P 「いや、でも、その、ほら」

P 「ヤバい！ すでに押し切られそうだ…強気強気に行かなければ、志希ちゃんの二の舞に」

周子 「…なあ。お願い」キユ

P 「はい」

P 「負けました。綺麗な人の上目遣いに勝てる男が居るだろうか、いや居ない」

周子 「やったあ♪ やつぱりシューコちゃんの目に狂いはなかったんやなく」

P 「(はああああ。まあ、いいか。悪い人ではなさそうだし?)」

周子 「そや！ まだ、お兄さんの名前聞いてないわ」

P 「Pです。えつと、あなたはシューコちゃん？ でいいんですか？」

周子 「Pさんね。あたしは塩見周子って言うねん♪ シューコちゃんって呼んでな

く。あと、敬語やなくてええよ」

P「じゃあ、シユーコちゃん。えっと、歩きながらでいいから、もつと詳しく事情を聞かせてくれない？」

周子「それもそうやね！でも、その前に…」

P「その前に？」

周子「おなかすいたーん♪」

P「そういや、お金ないんだったね。家で作るつもりだったから、僕の料理で良ければ」

周子「ほんま!? シユーコちゃんはたべれるなら何でもいいよ。食べさせてもらう身分で贅沢は言わないよ」

P「なら、一緒に行こうか。途中スーパー寄って、買い物もして帰ろう」

周子「は〜い♪ …なんか、同棲したてのカップルみたいやな」クスツ

P「え？ 今、なんて言ったの？」

周子「なんもないよ〜さあ、行こっか」

く自室く

周子「ふう〜お腹いっぱい」

P「お粗末様でした」

P「あれから買い物を買って一緒に家に帰り、晩御飯を食べた。シユーコちゃんと

少し過ぎして、わかったことは一つ。読めない。自由人に見えるけど、天然って感じではないし……)」

周子「じゃあ、あたしが皿洗いするな」

P「そんな、ソファに沈んだまま言われてもね……まあ、今日は客人なんだからゆつくりしててよ」

P「話を聞いたところ京都の和菓子屋の娘さんで、高校卒業してから何となく、お店手伝ってたけど、先日父親と将来の話で口論になり、家出したそうさ。今まではネカフェやカラオケで泊まってたそうだが、お金が尽きて結構困ってたらしい……)」

周子「ええ、それは悪いや〜ん」

P「それより、お風呂入ってきなよ。沸かしておいたからさ」

周子「19歳で男の人からそんなこと言われるなんて……お父さんお母さんシューコは大人の階段を登ります」シクシク

P「そんな僕を鬼畜扱いたくないですよ……。ここ最近、湯船に浸かれてないんじゃないかな?と思つて沸かしておいたんだ。どうせなんだし、ゆつくりしていつてよ」

周子「あはは、冗談だよ。ありがと、Pさん♪お風呂いただくね?」

P「どうぞ〜」

周子「覗いちゃや〜よ」

P 「覗かないって…」

P 「(なんだか、この女の子が部屋に入る事が普通にかつてきているような…)」

… (時間経過)

周子 「ほんまにベツト使ってええの？」

P 「もちろん。シューコちゃんはお客さんだからね。そんないいものじゃないけど、疲れを癒してよ」

周子 「………」

P 「ん？ どうかした？ もしかして、臭いとか…」

周子 「…なんでなん？」

P 「え？」

周子 「…なんで、そんなに優しくしてくれるん？」

P 「シューコちゃんが困ってたから？ かな」

周子 「…そんな事だけで？」

P 「僕が昔、困ってた時に色んな人が助けられたんだ。だから、困ってる人には優しく。できることはしてあげる。そうやって、お返ししてるんだよ」

周子 「…そっか。立派やな、Pさんは」

P 「そんな事ないよ。シューコちゃん、明日は実家に帰りなよ？ お金は貸してあげ

るからさ」

周子「流石にそんなことまでしてもらえへんよ。大丈夫、どうにか帰るから」

P「困った時はお互い様。だから、遠慮なんてしなくていいよ。今度、シューコちゃんのお店に遊びに行くから、その時に返してよ」

周子「…うん。じゃあ、お言葉に甘えることにしよう！　ありがと、Pさん♪」

P「じゃあ、寝ようか。おやすみ」カチツ

周子「おやすみ♪」

P「数分後シューコちゃんは寝息を立てて、ぐっすり寝てしまった。やっぱり、疲れてたんだろうな…。それにしても今週は色んな事があったな。明日からまた頑張ろう！」

二回生 春学期 2週目 月曜日

（通学路）

P「（シユーコちゃんと朝ごはんを食べた後に、僕は大学へ、シユーコちゃんは実家へと出た）」

P「（もう、実家に帰るしか選択肢はないだろうし、心配は無いはず…夏休みにでも京都に行こうかな？ お店の名前も教えてもらったし！」）

幸子「フフーン！ やっぱり、ボクの予想は当たりましたよ！ どうですか！」ド
ヤアアアア

??「あ、あの人が言ってたPさん？」

??「な、なんだキノコじゃないのか…」

P「（目の前を女子中学生三人に阻まれる。てか、なぜ横じゃなくて縦に三人並んでるんだ）」

幸子「おはようございます♪ その後、探し物の調査はどうなりましたか？ あなたから連絡が来ませんでしたので、こちらから伺いに来てあげたんですよ？」

P「（横はねの自称カワイイボク、幸子が先頭。後ろ二人は知らないな…）」

P「おはよう、幸子ちゃん。あ、そういえば！ 幸子ちゃんの探してたのこれかな？」
ゴソゴソ

P「大学に落ちてたみたいで、親切な人が届けてくれたみたいだよ。はい」スツ
幸子「ここ、これです！ ゾンビとキノコ！」

??「よ、よかったね、幸子ちゃん」

??「ぼ、ぼっちの私には見つけられなかっただろうな…」

P「よかったね、幸子ちゃん」ナデナデ

幸子「フ、フフーン♪ 貴方も、このカワイイボクのお手伝いできてよかったですね。褒めてあげましょう」

P「ありがたき幸せ。で、幸子ちゃんの後ろに並んでいる二人は？」

??「ど、どうも〜」ヒラヒラ

??「あ、ど、ども」

幸子「そうでした！ 何を隠そう、このストラップをくれたお二人なんですよ！」

P「ああ、なるほどね。それでついて来てもらったんだ」

幸子「ち、違いますよ！ お二人がどうしてもと言うので、仕方なくついて来てもらっただけで…」

小梅「幸子ちゃんの友達の小梅小梅です」

P「幸子ちゃんの後ろからひよっこできてきて、お辞儀する小梅ちゃん。袖が余りすぎて手が隠れてる。萌え袖ってレベルではないな。肌も白く、どこか不思議な雰囲気纏ってる)」

輝子「ど、どうも、友達その二。星輝子です。フヒ」

P「(小梅の後ろからひよっこできてきて、お辞儀する輝子ちゃん。輝子ちゃんも小梅ちゃんとはまた違う不思議な雰囲気纏ってる。幸子ちゃんの友達ユニークな子が多いのかも…。まあ、幸子ちゃんがだいぶユニークだから)」

P「どうも、Pです。二人とも、どうして一緒に来たの？」

小梅&輝子「幸子ちゃんが寂しそうな顔してたから」

幸子「な！何を言ってるんですか!?! そ、そんなことは…」

P「なるほどね。みんな仲良いんだね」

小梅「はい。ふふふ」

輝子「そう、だな。フヒ」

幸子「そ、それはまあ、仲は良いですよ！何たって、142cm同盟ですから」

P「ん？142cm同盟？」

小梅「ふふっ。そーなんだ。この三人には共通点があつて」

輝子「ふひ。縦に並んでるのも実はその共通点の関係してたりして」

P 「ああ、身長が142cmで一緒ってことかな？」

幸子 「その通りです！」 フーン

P 「ん？ なら、縦に並ぶんじゃないかと、横に並んだ方が分かりやすいじゃない？」

小梅 「縦に並ぶと」

輝子 「幸子ちゃんに隠れられる」

P 「いや、隠れてないよ？」

輝子 「なん、だと」

小梅 「でも、幸子ちゃんが前だと安心」

幸子 「そうでしょう、そうでしょう！ なんせ、ボクはカワイイですから！」

P 「盾にできるから？」

小梅 「そう！」 キラキラ

P 「(今日一のキラキラいただきました)」

幸子 「なんですか、その理由は!? このカワイイボクを盾にするなんて！」

輝子 「じよ、冗談だと思っぞ？」

小梅 「うん、冗談だよ？ 幸子ちゃんは頼り甲斐があるから、つつい先頭を任しちゃ

うよね」

幸子 「で、ですよ！ もう、紛らわしい冗談はやめてくださいよ」

小梅「えへへ、ごめんなさい♪」

P「(なんだろうこの、ポカポカするやり取りは。女子中学生の会話って、こんな可愛い感じなのかな。それとも、この三人が可愛いのか。まあ、後者だろうな)」

輝子「そ、そろそろ向かわないとまずくないか？」

幸子「そうですね！ では、行きましょうか」

小梅「その前にPさんに言わなきゃでしょ？」

輝子「そ、そうだな。お礼の言葉をまだ言っていない」

幸子「う…」

P「あはは、そんな改まってお礼なんていいよ。僕は幸子ちゃんのお手伝いできて光栄だったよ」

幸子「そうでしょう♪ このカワイイボクの…」

小梅「幸子ちゃん」

輝子「お礼は言わないと。だな」

幸子「うううう…。あ、ありがとうございました…」

P「どうも。また、困ったら何でも相談してね」ナデナデ

幸子「そ、そうですね。また、ボクを助ける機会を与えてあげても」

小梅「Pさん、ありがとうございました。またね〜」

輝子「あ、ありがと。じゃあ」

幸子「あ、待つてくださいよ」

P「楽しい三人組だったな。また会えたらいいな。さて、僕も大学に行くか」
く花壇く

P「先週の月曜まではここで、一人でお昼ご飯を食べていた。だが！ 今日からはそう！」

夕美「あ、Pさん！ こんにちは♪」

P「(夕美ちゃんと食べる約束になってるのだ！ これでお昼ぼつちを脱出だ)」

P「こんにちはは、夕美ちゃん。待たせちゃったかな？」

夕美「ううん！ 私もついさつき着いたばかりだよ？」

P「なら、良かった。えっと、じゃあ、食べながら話しても…」

夕美「うん♪ あれ？ Pさんのお昼ごはんは？」

P「ああ、カバンの中に」ゴソゴソ

夕美「もしかして…」

P「あつた、このお弁当だよ」

夕美「可愛いお弁当だね♪ 彼女さんの手づくりかな？」

P「あいにく自分の手づくりなんだよね」ハアアア

夕美「ええ？ Pさんってお弁当作れるの？」

P「え？ うん。料理は元々好きで、朝早起きできた日には作るようにしてるんだよ」
夕美「凄いよ！ 男の子で自分の手づくりお弁当持ってきてる人なんて、なかなかいないよ！」

P「まあ、料理は昔からよくしてたからさ」

夕美「そうなんだ！ ねえねえ、私のサンドイッチと少し交換しない？」

P「え、いいの？ 夕美ちゃんのサンドイッチは手づくり？」

夕美「そうなの！ 周りの女友達にも手づくりで持ってきてる子すくなくってね。こ
うやって、お友達と交換するの夢だったの！」

P「夕美ちゃんの手づくりが食べられるなら、ぜひぜひ！」

夕美「はい！ どーそ♪」

P「ありがとう！ うん！ 美味しいよ」モグモグ

夕美「本当？ 良かった♪」

P「僕のお弁当もどうぞ。何でも食べてよ」

夕美「なら、この卵焼きを…」パク

P「ど、どうかな？」

夕美「美味しい♪ 少し甘めの味付けなのかな？」

P 「良かった〜。うん、妹が甘めの方が好きみたいで、よく作ってたから」

夕美 「Pさん、妹居るんだ！ 何だか、知らないことばっかりで楽しいね」

P 「まだ二回しか会ってないからね」

夕美 「あ、そっか、そうだよ。なんだか、ずっと昔から知ってたような気がするんだよね〜」

P 「そう？ でも、夕美ちゃんみたいな可愛い人を忘れないと思うんだけど…」

夕美 「美人だなんて、そんな…／＼」

志希 「くんかくんか、うーん、いい匂い〜」

P 「うわ!? 志希ちゃん？ どこから!?」

志希 「呼ばれて、飛び出て、志希ちゃ〜ん」

P 「いや、答えになってないよ…」

夕美 「…えっと、Pさんのお友達かな？」

P 「う〜ん。友達って言うか…。夕美ちゃんは一ノ瀬教授って知ってる？」

夕美 「一ノ瀬教授？ 聞いたことないかも」

志希 「すんすんすん」

P 「あの人、理系の教授だもんね。そこまで有名って感じでもないし…。この子は、そ
の一ノ瀬教授の娘さんの一ノ瀬志希ちゃん」

夕美「そ、そうなんだ」

志希「くんかくんかくんか」

夕美「えっと、Pさんをずっと匂ってるのは、どうしてかな？」

P「僕にもわからないよ…。こら、志希ちゃん！」クビスジヒョイ

志希「にああん♪ おろ？ そちらのおねーさんは？」

P「見えてなかったんだね…。僕の友達の相葉夕美ちゃんだよ」

夕美「ど、どうも」

志希「ども〜」ヒラヒラ

P「それで、どうして志希ちゃんがここに？」

志希「不思議なことを言うね〜。志希ちゃんは自由を愛しているから、行きたい時に行きたい所に行くのだから〜」

夕美「それが、Pさんのところってこと？」

志希「う〜ん、と言うか、失踪中に知ってる匂いがしたから来てみたら、Pさんが居たって感じかにはや？」ニヤハハ

P「失踪って…」

夕美「ん？ と言うことは、志希ちゃんはPさんの匂いを知ってたってこと？」

志希「だって、この間一晩を共に過ごしたからね〜」

P 「あ、それは、」

夕美 「Pさん？」

P 「いや、その違うくて」

志希 「一緒の布団に寝たのにや」

夕美 「Pさん」

P 「はい」

P 「(夕美ちゃんから漂うオーラが！ あんなにほんわかしてる人なのに！ オーラが！)」

夕美 「説明してください♪」

P 「…はい」

…(説明中)

夕美 「…まあ、Pさんの優しさが招いたことなら仕方ないのかも知れないけど、志希ちゃんも気をつけないとだよ？」

志希 「は〜い♪」

P 「以後、気をつけます」

P 「(ゆ、夕美ちゃんに文香さんとシユーコちゃん存在が知られたらやばい！)」

夕美 「後、私も部屋に連れて行くこと！」

P 「はい……はい？」

夕美 「お友達に下宿の子って居なくって！ 一人暮らしの人のお部屋に行ってみたかったの」

P 「え、いや、そんな誰かを呼べるような……」

夕美 「志希ちゃんはいいのに？」

P 「ぜひ来てください」

P 「まあ、正直、夕美ちゃんが遊びに来てくれるなら願ったり叶ったりだし……」

P 「ん？ あれ？ 志希ちゃんは？」

夕美 「あれ？ 本当だね、居ない」

P 「本当に自由なんだから……」

夕美 「ふふっ、でも、猫さんみたいで可愛い子だったね」

P 「確かに、猫みたいな子だね」

夕美 「じゃあ、私たちも行こっか」

P 「うん！ そろそろ授業だしね」

夕美 「また、来週ここでね♪ その時にPさんのお部屋に遊びに行く予定を決めよ」

く

P 「おっけい！ またね」

くバイト先 最珈琲く

P 「今日は未央もくる日なのに、遅いな…」

P 「まあ、相変わらず、お客さんは少ないんだけどね」

くカランコロンカラーン

未央 「やあやあやあ、Pさん！ 元気かね？」

P 「うん、元気だよ」

未央 「そうかいそうかい！ 元気はいいことだねく。そんな元気なPさんには」

P 「何をくれるんだ？」

未央 「お客さんをプレゼントです！」

くカランコロンカラーン

茜 「こんにちはー！！」

?? 「こ、こんにちはく」

P 「あ、茜ちゃん!? …それと」

?? 「は、初めまして、未央ちゃんと茜ちゃんの友達で」

未央 「高森藍子ちゃんこと、あーちゃんです！」 ダキッ

茜 「藍子ちゃーん」 ダキッ

藍子 「きやあ！もう、二人とも急に抱きつかないでくださいよく」

P 「おお、美少女サンドイツチだ」

P 「えっと、僕はPです」

藍子 「あ、ご丁寧にありがとうございます♪ Pさんのことは未央ちゃんと茜ちゃんから聞いてますよ」

P 「そうなの？ とうか、未央と茜ちゃんって友達だったんだね」

未央 「友達とうか」ガシッ

茜 「親友、ですね」ガシッ

藍子 「ふふっ」

P 「茜ちゃんと藍子ちゃんはお席にどうぞ。未央も今日はバイト休みにする？ お客

さんもないし、大丈夫だと思うよ？」

未央 「違うのだよ！ Pさん！ 私は親友の二人にバイトをしてる姿を見てもらうために今日、呼んだんだよ」

P 「なら、早く着替えてくる」

未央 「は〜い♪ あーちゃんとあかねちゃん、ちよつと待っててね〜」

藍子 「は〜い。じゃあ、座りましょうか、茜ちゃん」

茜 「あ、待っててください！ Pさん！ お父さんは居ますか？」

P 「奥のキッチンに居ると思うよ？ 会いに行ってくる？」

茜「はい！ 藍子ちゃん、少し待っててください！ お父さん！ お母さんから伝言が…」

P「あはは、店長も大変だな…」

藍子「一人になってしまいました」

P「そうだね。好きな席に座って待ってたらどう？」

藍子「はい♪」

藍子「あ、あの、Pさんに一つ質問が…」

P「ん？ 何かな？」

藍子「えっと、彼女さんって居たりしますか？」

P「えええええええ、何この急展開。これをなんて答えるかでこの先の人生決まっちゃいそうな感じするんだけど」

P「ど、どうして？」

P「(とりあえず、緊急回避)」

藍子「そ、その、うーん、なんて言うか気になっただけではダメですか？」

P「(煮え切らない返事…これは、まさか、あり得るのか。だが、相手はJKだ…！ 犯罪ではないのか)」

P「いないよ。恥ずかしいながら…」

P 「(どこうくる!)」

藍子 「そうなんですね! と言うことは…」

未央 「やあやあ、お待たせ〜」

P 「(タイミンググ〜〜〜)」

茜 「みなさん! お父さんが特製のミックスジュースをご馳走してくれるみたいですよ〜!」

P 「(タイミンググ〜〜〜〜〜)」

藍子 「ふふつ、ならお言葉に甘えて、いただきましようか?」

未央 「うん! じゃあ、Pさん後は頼んだ!」

茜 「行きましょ〜」

P 「う、うん! 任せろ〜」

P 「(モヤモヤする! いや、まあ、そんな事はないとはわかっててもモヤモヤする!)」

藍子 「ま、待ってよ〜。あ、Pさん」

P 「え?」

藍子 「さつき私が聞いた事は、未央ちゃんには内緒ですよ? お願ひしますね♪ ですよ〜」

P 「う、うん。了解」

P 「(なんで、未央だけなんだろう?)」

未央 「Pさくん、ミックスジュース運ぶの手伝って〜」

P 「わかった! 今すぐ行く」

P 「(まあ、考えても仕方ないか)」

P 「(その後も結局、未央は3人で話し込んで働くそぶりを見せないのであった。まあ、お客さん来なかったんだけどね)」

二回生 春学期 2週目 火曜日

〈教室〉

美波「あ、おはようございます！」ペコッ

P「おはよう」ペコッ

P「(一限の授業開始前、この間の席に居た僕のところにも美波ちゃんに来てくれた)」

美波「先週はありがとうございました♪ノート本当に助かりました！あの、Pさんのノートの取り方で聞きたいことが…」

P「え？ そんな変なところあった？」

美波「いえ、変っていうよりか…」ペラッ

美波「内容の区切りのいいところで、まとめみたいなのを書いてますよね？ ……ここです」

P「う、うん！ そうなんだけど…」

P「(朝練終わりで暑いからか、緩めの服だから屈むと、胸が!? 谷間が!?)」

美波「このまとめみたいなのは、Pさんが自分で考えて書いているんですか？」

P「まあ、うん、そうだね」

せんから…」

P 「うん。そうだね、確かに授業聞いてないとレジュメだけでは難しいかも」

美波 「ですから、分からないところは今週の授業終わりに教授に聞きに行こうと思っ
ていたんです」

P 「真面目だな…」

美波 「でも、必要ありませんでした。このPさんのまとめを読んだだけで理解でき
ちやいました」

P 「そんな良いものじゃ…」

美波 「…教えてください！」

P 「え？ な、なにを？」

美波 「どうしたらこんな要約をできるのか、をです！」

P 「教えてくださいと言われても、教授の話聞いた上で自分の言葉に換えてるだけ
だから…」

美波 「な、なら、せめて見せてください！ 今日もお隣いいですか？」

P 「もちろん！ どうぞ」

美波 「ありがとうございます♪」スッ

くキーンコーンコーンコーン

P 「あ、丁度始業のチャイムだね」

美波 「はい！ よろしくお願ひします！」

P 「そんな畏まらないでも…」

∴ (時間経過)

＜キーンコーンコーンコーン＞

P 「(終始チラチラ見られてたから集中できなかつた…。)」

美波 「…なるほど。やっぱり、やってらっしやることはシンプルなんですネ」

P 「え？」

美波 「本当に教授の話聞いて、レジユメの内容をまとめているだけ…でも、その要約のレベルが高すぎる」

P 「あの…そんなに褒められても何もでないよ？」

美波 「語彙力なのかな？ ∴それとも単純に才能？ いや、でも、そんな簡単なのこ

とじや…」

P 「あの、新田さん？」

美波 「Pさん！」

P 「は、はい！」

美波 「今日のお昼ご飯のご予定はありますか？」

P 「いや、特にはないよ?」

美波 「ご一緒に食堂でお昼なんて、どうでしょう? ノートをお借りしたお礼もしたいです。まだお聞きしたいこともありますので」

P 「ランチのお誘い! 人には親切にするべきだな…」

P 「もちろん! じゃあ、行こっか?」

… (移動中)

… 学内 食堂へ

P 「結構、混んでたけど座れたね。美波ちゃん、先にお昼買って来ていいよ。座って待ってるから」

美波 「そんな! Pさんは先輩なんですから、私が待っていますよ!」

P 「(流石に体育会系なだけあるな。僕はこういうの気にしないタイプなんだけど、美波ちゃんは引かなさそうだし…)」

P 「じゃあ、お願いしていいかな? すぐに戻ってくるから!」

美波 「はい! ごゆっくり!」

P 「(いい子だな、美波ちゃん。さて、さつと買って、戻ろうか)」

P 「(と、思ってたんだけど…)」

フレデリカ 「だーれだ?」

P「フレちゃんが僕の目の前で腰に手を当てて、自分が目を瞑りながら仁王立ちしてた」

フレデリカ「あれれ？ わからないのかな？ ふふっ」

P「…どこからツツコンだらいいんだこれ」

フレデリカ「大ヒントです！私の生まれはおフランスでくす。ボンジュール」

P「フレちゃん」

フレデリカ「大正解くす」ドドーン

P「もう、ツツコム気すらしらないよ…」

フレデリカ「お久しぶり♪ 佐藤さん、元気にしてた？」

P「佐藤さんは元気なんじゃないかな？でも、僕は佐藤さんじゃないから、その質問には答えられないかな？」

フレデリカ「あれ？ 佐藤さんじゃない？ …あ、加藤さんだ！」

P「違うよ…」

フレデリカ「そうだ！ 尾藤さんだ！」

P「(どうして、缶コーヒーみたいになってるんだろう？ いや、フレちゃんに意図なんてないんだろうな…)」

P「Pだよ。フレちゃんも元気にしてた？」

フレデリカ「そうだ！ Pさんだ！ 今日ね、とつても調子がいいんだ〜〜いつもだけど〜〜ふっ」

P「流石、フレちゃん。で、どうしたの？ 僕に用事？」

フレデリカ「ええつとね〜〜ふらつと食堂に行ったら、Pさんが居たから、これはだ〜れだをやるチャンスだと思つたの！」

P「うん。つまり、用はないんだね」

フレデリカ「そ〜ともゆう〜」

P「（フレちゃんのペースに巻き込まれたら、美波ちゃんを待たせてしまうことになる！ どうか、切り抜けないと！）」

フレデリカ「Pさんはお昼はこれから？」

P「え、ああ、そうだよ？ フレちゃんも？」

フレデリカ「そ〜なのです！ だから、一緒に食べよう〜」

P「誘ってくれるのは嬉しいんだけど、今日は先約が居て…」

フレデリカ「フレちゃん気にしない」

P「いや、フレちゃんが気にしなくても、美波ちゃんが」

フレデリカ「わあお！ しかも、女の子だ！ フレちゃんにも会わせてシルブプレ〜」

P「ど、ど、どうしよう。フレちゃんを連れて行くと確実にフレちゃんのペースに巻き込まれる。だが、こんな可愛い子をお願いを断れるの僕は!?!」

∴ (時間経過)

美波「えっと、そちらの方は？」

フレデリカ「Pさんのお友達の方フレデリカで〜す♪ ボンジュール」

美波「ボ、ボンジュール」

P「断れませんでした。そりゃ、無理だよ。瞳をうるうるさせてたんだよ？ 男なら

無理。一発K.O.」

美波「ちよつと、Pさん！」コソコソ

P「はい…」

美波「どういふことか説明してください！ どういう状況なんですか？」

P「お昼ご飯を買いに行ったら、友達に会って、一緒に食べようと誘われ、断りきれなくて連れてきました」

フレデリカ「フンフンフフォンフフー、フレデリカ〜♪」

美波「そのお友達が、ハーフの方なんて…」

P「まあ、確かにびっくりするよね…でも、フレちゃんは日本語しか話せないし、楽しい子だから、ほら？」

フレデリカ「フレちゃん元気な子！」

美波「まあ、お友達が増えることは良いことですから！一緒に食べましょうか？」

フレデリカ「やった〜！ よろしくね、美波ちゃん♪」ギユ

美波「こ、こちらこそ、よろしくお願ひしますね♪」ギユ

P「(美女二人のハグとか。眼福眼福)」

美波「そ、それじゃ私もすぐに買ってきますから、待っていてくださいね！」

フレデリカ「いつてらっしや〜い」

P「(美波ちゃんはちゃんと聞いてくれるし、真面目だけど、フレちゃんは真反対だからな…。でも、二人ともいい子だから、仲良くできるはず)」

フレデリカ「ねえねえ、Pさん？」

P「どうかした？」

フレデリカ「美波ちゃんはPさんの彼女？」

P「え？いやいや、そんな訳ないよ。美波ちゃんは友達？ 後輩？ まあ、そんな

感じだよ」

フレデリカ「ええ〜そうだと思ったのにな〜フレちゃんでも間違えることがあるなんて!!」

P「それ、自分で言っちゃうんだね…」

フレデリカ「ふふっ♪」

P「今日もフレちゃん全開だな…」

P「この後、美波ちゃんとフレちゃんと一緒にご飯を食べた。やはり、フレちゃんのペースに振り回されて生産的な話は何もできないのであった…」

く大学内 移動中く

くブーブーブーブー、ブーブーブーブー

P「電話だ…誰からだ？」スツ

P「ああああ、名前だけで要件がわかってしまった…まあ、いいか先週と同じ感じの休日になってしまっけど)」

P「もしも…」

??「Pくーん！」

P「うわっ！」

P「声大きいよ、莉嘉！」

莉嘉「ええええ、挨拶は大きな声で。でしょ？」

P「それは電話では適応されないの」

莉嘉「えええ！ でもでも、こんな可愛いJCからの電話なら嬉しいでしょ？」

P「それはそうだけど…」

P 「この莉嘉は僕の従姉妹で城ヶ崎家の次女だ。城ヶ崎家のお家は僕の大学から近くて、大学に入学した直後はよく叔母さんにお世話になった。その時によく莉嘉とも会っていたので、今でも仲良くしてくれている」

P 「で、どうしたの？」

莉嘉 「今週末、おねーちゃんとショッピングに行くんだけど、一緒に行こう！」

P 「土曜日？ 日曜日？」

莉嘉 「もち、土曜だよ！」

P 「なんで、もちろんなんだよ……とりあえず、土曜を空けておけばいいんだね？」

莉嘉 「うん！ やったー♪ おねーちゃんと何するか決めておくから、楽しみにしておいてね♪」

P 「うん、楽しみにしてるね！ じゃあ、また土曜ね〜」

莉嘉 「ばいばい」

P 「(莉嘉が電話してくる時は決まって、おねーちゃんとの遊びに僕を誘う。なんで、おねーちゃんから僕と二人で遊ぶのは禁止されているらしい。美嘉も何でもそんなことを……信頼されてないのかな?)」

P 「(まあ、土曜日にそれとなく聞いてみようかな?)」

〜帰り道〜

P 「今日はバイトもないし、特に予定もないからな…」
くわん！

P 「うお」

凜 「こら、はなこ！ すいませ…なんだ、Pさんじゃん」

P 「あれ？ 凜ちゃん？ 何してるの？」

凜 「犬の散歩。見てわからない？ それにしても、ふふっ」

P 「どうかした？」

凜 「うお。だって。ふふふっ」

P 「そ、それは考え事してる時に急に吠えられたから」

凜 「しかも、情けない顔してた。これは未央に報告だね」

P 「や、やめてくれ。未央にいじられるとろくなことにならないから」

凜 「その気持ちはなんとなくわかるけどね。今帰りのの？」

P 「そうだよ。凜ちゃんは家の手伝いも散歩もして、偉いな」

凜 「別に。どっちも好きなことだから。あ」

P 「ん？」

凜 「ちようどいいや。Pさん、これから時間あるでしょ？」

P 「あるけど…なんで決めつけられてるんだらう」

凜「なら、今から一緒に店に来てよ」

P「うん、わかった。でも、どうして？」

凜「着いたらわかるから。ほら行くよ」スタスタスタ

P「最近、女の子に振り回され過ぎてるような気がする…まあ、楽しいからいいか」
（Flower Shop SHIBUYA）

凜「じゃあ、私は裏から入るから」

P「え？ ちよつと！ どういうこと？」

凜「いいから入ってみて、じゃあ」

P「本当に行っちゃったよ…自由だな…」

P「まあ、とりあえず入ってみようか。すいませーん」ガラガラガラ

??「い、いらっしませー！」

P「え？」

P「（いらっしませ？ 凜んだのかな？）」

??「…あ、ああ、囁んじやったよ、恥ずかしすぎる…／＼」ボソボソ

P「（顔が真っ赤だ。というか誰だろう？ 凜ちゃんのお母さんにしては若すぎるし…っていか制服着てるし。こないだの凜ちゃんみたいなのが格好つてことは、凜ちゃんの

友達なのかな？）」

?? 「お客さん来ないって言うから代わってやったのに…凧のやつ！」

P 「あ、やっぱり友達みたいだな。凧ちゃんもわざわざ僕をお客さんとして行かせなくとも…」

P 「あのー」

?? 「は、はい！ あの、そのいかがが致しましたでございませうか？ いや、えっと、

いかがでしょうか？ 違う！ ああ、もう急にできるかよ…」

P 「(うわあ、ここまでテンパってるのが伝わるのも面白いな)」

P 「えっと、タメ口で大丈夫だよ？」

?? 「え？ い、いいのか？」

P 「うん！ 僕はその大学の生徒だし、君もおそらく345の生徒だよね？」

?? 「ま、まあな」

P 「だったら、歳も近いし気にすることないよ」

?? 「あ、ありがと…」

P 「それに、凧ちゃんの友達だよね？」

?? 「ふえ？ あんた、凧の知り合い？」

P 「うん、そうだね。ここまで凧ちゃんと一緒に帰って来たくらいには…」

?? 「え？ じゃあ、凧のやつ、もう帰って来てる？」

P 「……うん」

?? 「……………／／／／／／／／」ボン

P 「(あ、また赤くなつた)」

?? 「り、凜！ どこだ！」

凜 「ここだよ、奈緒」スッ

奈緒 「なあ！ 凜！ いつから見てたんだ!？」

凜 「いらつしませ」フフツ

奈緒 「ぬあ!？ くうああああくくもおおお、またそうやってからかつて!」

凜 「ごめん、ごめん。ほら、散歩も終わったし、加蓮ももうすぐ来る頃でしょ？」

奈緒 「かつ、加蓮にこの姿を見られたらヤバイ！ 着替えて来る!」

P 「(加蓮?…もしかして…)」

くガラガラガラ

加蓮 「やつほくく、つて」

P 「(やつぱり、加蓮ちゃんだ)」

加蓮 「Pさんじゃん!」ギユ

凜、奈緒 「え?」

P 「ちよつ! いきなり抱きついたら危ないつて!」ガシツ

加蓮「こんなところでどうしたの？」

P「帰り道に凜ちゃんに会って、連れて来られたんだよ」

加蓮「そっか、そっか！ 凜に感謝しなきゃ♪」

凜「ちよつと待って。加蓮はなんでPさんのこと知ってるの？」

加蓮「こないだ二人に話したでしょ？ 唯と遊んだ日にしつこいナンパ野郎から助け

てくれた大学生。その大学生がPさん♪」

凜「…こんなことってあるんだね」

奈緒「私、全然話について行けてないんだけど」

加蓮「そー言えば、奈緒はどうして凜のお店のエプロン着けてるの？ お店屋さん

（ひたひた）

奈緒「ち、ちがうわー！」

凜「とりあえず、状況を整理しよっか。Pさんも、まずは加蓮から離れて」

P「いや、僕がひつついてるみたいない方やめてよ…」

…（諸々説明＋奈緒お着替え完了）

凜「…つてこと」

加蓮「ふうーん、凜とPさんが知り合いだったのはそういうことだったんだ。で、奈

緒はまんまと嵌められたと。それはいつものことだね」

奈緒「本当に、何度も何度も…この二人は私をからかって！」

P「で、でも、奈緒ちゃんも店員さんの格好似合ってたよ？ とつても可愛かったし」

奈緒「か、か、か、かわいい、だど…／／／」

P「（また赤くなつた。凜ちゃんと加蓮ちゃんがからかいたくなるのも頷けるかも）」

加蓮「ああ〜Pさんが奈緒を口説いてる〜」

凜「本当に素でやってるんだね」

奈緒「ああ！ もう、わかつたから！ もう、話は終わりだろ？ なら、早く行こうよ」

P「そう言えば、これからみんなどこかに行くの？」

凜「何？ 付いてきたいの？」

P「いやいや、そんなわけ」

加蓮「もちろん！ 連れて行くに決まってるじゃん♪」ガシツ

P & 凜 & 奈緒「え？」

加蓮「だって、私たちだけで行ってナンパされたら面倒でしょ？ Pさんは私たちを

守ってくれるよね？」

P「日曜もこんな流れのまま連れて行かれたような…」

奈緒「わ、私は反対だ！ こんな、今日初めて会った奴とカラオケなんて行けるか！」

P 「(カラオケ：加蓮ちゃん本当にカラオケ好きなんだな)」

凜 「奈緒が嫌なのは別の理由でしょ？」

奈緒 「そ、それは！」

加蓮 「アニソン歌えなくなるもんね〜」

奈緒 「こ、こら！ 加蓮！」

P 「アニソン？ 奈緒ちゃんはアニソン歌うの？」

奈緒 「ほ、ほら、こうなるだろ…」

P 「僕もアニソン好きだよ？」

奈緒 「へ？」

加蓮 「そうなの？ でも、この間は歌ってなかったじゃん」

P 「ほら、アニソンって知らない人からしたら盛り上がりにくかったりするでしょ？」

だから…」

奈緒 「わかる！ その気持ち、わかるよ！」 ギュ

P 「(あ、手を握られた)」

奈緒 「アニソンって知ってる人なら盛り上がってくれただけど、知らない人と行くとアニメの映像が流れるだけで白けちゃったりするだろ？ でも、せっかくカラオケ行くんだから好きな歌目一杯歌いたいし、でもでも、そもそも私がアニメ好きだったのこ

を知ってる人自体少なくて！ いや、別に隠そうとしてるわけじゃないんだ、自分から言うことじゃないから言わないだけで聞かれたらそりや言うし」

加蓮「ありやりや、奈緒がスイツチ入っちゃた。っていうか奈緒が男の手の握ってるの初めて見たかも！」

凜「そう言えば…そうだね。写真撮っておこうか」パシヤ

奈緒「へ？ どうして今、写真なんて…」

凜「貴重な一枚」スツ

奈緒「はう」パッ

P「(あ、離れた)」

奈緒「……………／／／」

P「(あ、赤くなつた)」

奈緒「は、恥ずかしすぎるく〜」ダツ

加蓮「あ、奈緒く待ってよ。ほら、Pさん、追いかけるよ？」ガシツ

P「え？ また、このパターン？」

凜「こうなつたら付き合ってもらうよ。さあ、行こう」

P「(この後、奈緒ちゃんに追いつき、四人でカラオケに。奈緒ちゃんと途中からアニソン縛りみたいになって、それはそれで楽しかった)」